

ブズルク・ブン・シャフリヤール
『インド奇談集』に関する新資料

家 島 彦 一

(アジア・アフリカ言語文化研究所)

A New Material on Buzurk b. Shahriyār's
Kitāb 'Ajā'ib al-Hind

YAJIMA, Hikoichi

Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa

Buzurk b. Shahriyār, from Rām-Hurmuz, a small town of Khūzistān province in Iran, was a Persian nākhudhā (ship-owner, pilot or shipmaster) of A.H.4th/A.D.10th century and author of the *Kitāb 'Ajā'ib al-Hind (Book of the Marvels of India)*. His home town was probably Sīrāf, one of the most prosperous trading ports on the Iranian shore of the Persian Gulf. This book is a collection in Arabic of 136 stories and anecdotes gathered by the author from ship-masters, pilots, traders and other seafaring men who used to sail the Indian Ocean.

In the consensus of most preceding scholars, the only unique ancient manuscript known, Ms. no.3306 was in the old collection of the Aya Sofia Mosque, and now preserved in the Sülaymaniye Library in Istanbul. During the late nineteenth century, a copy of this manuscript was made for the famous orientalist C. Schefer in Istanbul, and was sent to Paris (this copy is now preserved in the Bibliothèque National of Paris, Ms. Arabe 5506). Based on Ms. no.3306, the Arabic text was edited by P.A. van der Lith together with a French translation by M. Devic, Leiden 1883–86. This text and translation has been used by a wide range of scholars as a most trustworthy study on Buzurk's book.

In 1971 while researching Arabic manuscripts preserved in Nūr Osmanie Library in Istanbul, I was able to photograph an interesting copy of vol.2 of al-'Umarī's *Masālik al-Abṣār fī Mamālik al-Amṣār* which contains a collection of sailor's tales of the Indian Ocean. In 1988 Fuat Sezgin published in facsimile edition of twenty-seven books on "a geographical-historical-biographical encyclopaedia" titled *Masālik al-Abṣār fī Mamālik al-Amṣār* by Ibn Faḍl Allāh al-'Umarī (d.1349). By comparing with a microfilm of Nūr Osmanie's manuscript and vol.2 of Fuat Sezgin's edition, I firmly believed that "Chapter 3, Paragraph 3" of vol.2 of al-'Umarī's book was part of Buzurk's book, *Kitāb 'Ajā'ib al-Hind*.

Keywords: Sīrāf, Indian Ocean world, port of trade, nākhudhā, maritime trade
キーワード: スィーラーフ, インド洋海域世界, 交易港, ナーホダー, 海上交易

The aim of this article is to clarify the following two points: ① to identify the contents of al-'Umārī's manuscript with Buzurk's book, ② to analyze unique values of al-'Umārī's manuscript as new historical materials in the study of "the Indian Ocean world" in the 10th century.

The tales described in al-'Umārī's book are unnumbered in Arabic, but can be divided into 77 tales, anecdotes and apothegms. No perceptible plan can be discovered in the arrangement of the 77 tales. Six of these are dated, the earliest being A.H.270 (A.D.883/84), and the latest date falling within the reign of the Abbasid Caliph al-Ṭā'ī' (A.D.974-91). There are three very important tales dated between A.H.361 (971/72) and 367 (977/78). From these tales, it seems clear to us that the author had stayed several times in Kalah (Kalah Bār), Ṣanf (Champa), Sarbuza (Śrivijaya) and Banjālān (Bengal).

In conclusion, it is clear to us that "Chapter 3, Paragraph 3" of vol.2 of al-'Umārī's book is another version of Buzurk's book and is an abridged compilation rather than an original composition of Buzurk's book, but it contains more new information on Kalah (a port at the modern Bujan vally in Malaysia), Bengal (a port in the mouths of the Ganges), Ṣanf (Ṣanf Fūlaw, the Champa kingdom in the eastern coast of Indochina) and other places on the shores on the Indian Ocean which were unknown from other sources.

We therefore know that al-'Umārī's quotations on Buzurk's book, including the extra tales not mentioned by Aya Sofia Ms. no.3306 throw a new light on the history of the medieval Indian Ocean world.

- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 0. はじめに 1. アヤ・ソフィア本『インド奇談集』について 2. ウマリー本『インド奇談集』について | <ul style="list-style-type: none"> 3. アヤ・ソフィア本とウマリー本との内容比較 4. インド洋交易史研究におけるウマリー本の史的価値 5. 結びに代えて |
|--|--|

0. はじめに*

8世紀の半ばから10世紀半ばまでの約200年間にわたって、アッバース朝の首都バグダードは、新しく成立した国際的交易ネットワークを利用して活躍する商人たちの中心市場として繁栄を極めたり。バスラ (al-Baṣra), スィーラーフ (Sīrāf) やスハール (Ṣuḥār) な

どのペルシャ湾の諸港を交易拠点とした商人たちの中には、イスラム教徒だけでなく、ユダヤ教、キリスト教やゾロアスター教などの諸宗教・諸派の人々も多く含まれ、彼らは木造帆船ダウに乗ってアラビア海、インド洋を越え、東アフリカ・インド・東南アジア・中国の諸地域に至り、熱帯・亜熱帯特産の新奇な物産を西アジア・地中海世界の国際市場に

* 本稿は、1997年10月26日、第39回日本オリエント学会（於中近東文化センター）において行なった研究発表に基づいて作製された。

1) アッバース朝時代におけるバグダードの経済的・文化的役割については、[家島彦一 1991, pp.212-215] を参照。

集めた。

周知の通り、当時の海上航海や交易の活動状況を窺い知る代表的な記録史料として、スライマーン (Sulaymān) とアブー・ザイド (Abū Zayd) による『シナ・インド情報 *Akhbār al-Šīn wa'l-Hind*』、マスウディー (al-Mas'ūdī) 『黄金の牧場 *Murūj al-Dhahab*』とブズルク・ブン・シャフリヤール (Buzruk b. Shahriyār) 『インド奇談集 *Kutāb 'Ajā'ib al-Hind*』の3種が挙げられる²⁾。

それらの中でも、『インド奇談集』はインド洋の航海に豊富な経験を持ったイラン・フージスターン地方の町ラームフルムズ (Rāmhurmuz)³⁾ 出身のナーホダー (ナーフザー、船主兼船舶経営者)⁴⁾、ブズルク・ブン・シャフリヤール⁵⁾ が10世紀の前半から後半にかけて、ペルシャ湾の国際港スィーラーフ⁶⁾を拠点として活躍する、主にイラン系ナーホダー、船乗りや海上商人たちから直接・間接に聞き取った逸話や著者自身による体験の事実を収集・編纂した書である。その書には、船乗りたちの冒険談、航海中の嵐や

遭難・漂流、航海および交易上の慣行、インド洋周辺と島嶼部の自然地理・動植物・住民・習慣・風俗・特産品、港や島での原住民との交易の様子などが豊富に記録されている。それらの記録の一部には、荒唐無稽と思われる奇談、誇大な情報や想像上の伝説が含まれているが、同時に情報提供者の名前、情報の採集地、出来事に関連する年号や地名を正確に記した記録が多い。従って、『インド奇談集』は他の同時代の史料とも比較・検討をすることによって、10世紀のインド洋海域世界の具体的状況を明らかにする重要な史料を提供している。

さらに注目したい点は、本書が10世紀のインド洋海域世界において、おもに船乗りや海上商人たちが使用していた口語アラビア語の一部を文語化した、いわゆる〈海域共通アラビア語〉と称せられるような〈俗語アラビア語〉で書かれていることである⁷⁾。つまり海域共通語としてのアラビア語は、正則アラビア語文法の知識を十分に有しない海上民たち—アラビア語を母語とするアラブ系の人々

2) 本論文の「引用文献」[Sulaymān & Abū Zayd], [al-Mas'ūdī], [Buzruk] を参照。

3) ラームフルムズ (Rāmhurmuz, al-Rām Hurmuz, al-Rām) は、イラン・フージスターン地方のアフワーズの東に位置する町。その名前は、ササーン朝の王アルダシール・パーブガーン (Ardashīr Bābgān) の孫フルムズ王に由来すると伝えられる。10世紀のラームフルムズは、生糸の生産地として有名。ターブ川を下ると、ペルシャ湾に通じていることから、スィーラーフとも交易関係が深かった ([Ibn Ḥawqal. pp.258-259], [al-Muqaddasī. pp.413-415], [Le Strange. pp.243, 247])。

4) ナーホダー (nākhodā) : アラビア語ではナーフザー (nākhudhā) という。船舶経営の全権を委任された責任者のこと。しばしば共同出資した船主を兼ねていた。[家島彦一 1993, pp.449-450] を参照。

5) ブズルク・ブン・シャフリヤール (Buzruk b. Shahriyār) については、『インド奇談集』に自らが述べていることの他は明らかでない。名前から判断して、明らかにペルシャ系の人物。ペルシャ語でブズルクはブズルグ (buzurg) であり、〈大きな〉、〈偉大な〉の意味。またシャフリヤールはシャフル・ヤール (shahr-yār) であり、文字通りの意味は〈町の友〉、〈町の長、支配者〉のこと。したがって、ブズルク・ブン・シャフリヤールは〈町の長の子息の偉大なる人物〉であり、本名ではなかったと思われる。例えば [Enc. Is. vol.1, pp.203-204, 570, 1358, vol.2, p.583] と [Brockelmann, C. *Supple.*, vol.1, p.409] を参照。

6) スィーラーフ (Sīraf) は、8～10世紀にインド洋の航海と貿易活動のうえで繁栄した国際港であり、現在のイランのペルシャ湾岸のバンドル・ターヘリーに隣接してスィーラーフ遺跡が残されている。さしあたり [家島彦一 1993, pp.88-122] を参照。

7) 福原信義氏は、「古典アラビア語がジャーヒリア時代の詩語に由来し、後にコーランによって権威づけられ、正則化された文語であるのに対し、征服者たちと共にイスラム帝国内に広がり、日常語として用いられた諸俗語を〈中世アラビア語〉と呼ぶ」と述べて、俗語アラビア語史料としての『インド奇談集』の価値を強調している [藤本勝次・福原信義 1978, pp.5-6]。

の他に、ペルシャ語を母語とするイラン系、インド諸語を用いる人々などを含む一が運輸・貿易・金融・情報伝達などのコミュニケーションの手段として使用していた〈文字化された口語アラビア語〉のことである。またアラブ文学史の上では、本書はいわゆる〈奇談集 ('ajā'ib)〉⁸⁾に属するジャンルの先駆となるものである。

従来の研究では、現存する『インド奇談集』のアラビア語写本は、イスタンブルのスレイマニエ図書館に保管されている旧アヤ・ソフィア・モスク所蔵本 (Aya Sofia, Ms. No.3306) が唯一のものであると考えられてきた (以下では、この写本を A 本と呼ぶ)。しかし、筆者による最近の研究によって、『インド奇談集』の一部が14世紀前半に著されたウマリー (Ibn Faḍl Allāh al-'Umārī) の大百科全書『大都市を持つ諸王国についての洞察の道筋 *Masālik al-Abṣār fī Mamālik al-Amsār*』の中に収録されていることが明らかとなった (以下では、この写本を U 本と呼ぶ)。そこで本稿の目的は、① A 本と U 本との内容を比較・分析することによって、U 本が確かに『インド奇談集』の一部を伝えた写本であることを明らかにする、② U 本の独自の史的価値の分析を試みる、の2点にある。

1. アヤ・ソフィア本『インド奇談集』について

ブズルク・ブン・シャフリヤール『インド奇談集』の史的価値に注目した最初の研究者は、おそらくフランス人の著名なオリエント研究者 C. シェフェール (Charles Schefer) であろう。彼は、イスタンブルのフランス大

使館に勤務していた1870年代の頃、アヤ・ソフィア・モスク所蔵のアラビア語写本のなかに『インド奇談集』があることを知り、人を介してそれを写し取らせると、その写しをパリに送った⁹⁾。それがフランスのパリ国立図書館に現存している「アラブ写本 No.5958 (Bibliothèque Nationale de Paris, Ms. Arabe No.5958)」である (以下では、これを P 本と呼ぶ)。P 本の最終頁には『『インド奇談集』は祝福されたるラマダーン月12日にアブド・アッラー・ブン・ミルザー・ムハンマド・アルハウリー ('Abd Allāh b. Mirzā Muḥammad al-Khawli) の手によって完成された』とあるので、この人物が A 本を書き写したと思われる。但し、「ラマダーン月12日」が何年のラマダーン月を指したかは明らかでない。

L.M. ドゥヴィク (L.M. Devic) は P 本を見て、その内容に興味を抱くと、早速、1878年に『インドの驚異 *Les Merveille de l'Inde*』と題して、仏語訳を試みた¹⁰⁾。しかし、テキストとして利用した P 本には筆写の間違いが多く、また特殊な人名や地名についても読みが不明確であったので、それらを訂正・確認するために、再度、M. リッターハウゼン (M. Rittershausen) に依頼して A 本との照合を行わせた。その後、修正された P 本 (この原本が現在、何処に所蔵されているかは不明) を利用して、V. リース (Van der Lith) がアラビア語校訂テキストを作成し、それに基づいて L.M. ドゥヴィクがフランス語改訂訳を行い、1886年、共著で『ラームホルモズのシャフリヤールの子息、船長ボズルクによるインドの驚異の書 *Livre des Merveilles de l'Inde, par le capitaine Bozorg fils de chahriyār de*

8) 神の創造物の驚異の事柄 ('ajā'ib al-makhlūqāt) を説明した文学のジャンルは、9・10世紀のイスラム地理学と共に生まれ、10世紀半ば以後になると、アジャーイブ文学として一つのジャンルを形成するようになった [*Enc. Is.* vol.1, pp.203-204]。

9) [Buzurk. ed. & trad. préface, pp.v-viii] を参照。

10) この訳には、序文と注解が付いていたと言われるが、実際に公刊されたかは不明 ([Buzurk. ed. & trad. préface, p.vii])。

Rámhormoz』と題して刊行された¹¹⁾。この書は、アラビア語テキストと仏訳の他に、序文、特殊な語彙と地名の解説付き索引、項目別に整理した補遺 (Excursions)¹²⁾ を含むもので、それらの研究内容は現在においても利用価値が高い。

L.M. ドゥヴィクと V. リースによる校訂テキストおよび訳文は、それ以後、最も信頼すべき定本として多くの研究者によって利用された。クトゥビー (al-Kutubī), トゥライヒー (al-Turayhī), シャールーニー (Y. al-Shārūnī) などのアラビア語テキスト、また P. ケンネル (P. Quennell) と G.S.P. フリーマン・グレンヴィル (G.S.P. Freeman-Grenville) による英語訳, J. ソヴァジェ (J. Sauvaget) による仏語訳, R.L. エールリッヒ (R.I. Ehrlich) のロシア語訳, そして藤本勝次・福原信義の共同作業による日本語訳注などは、いずれも L.M. ドゥヴィクと V. リースの研究に依拠したものである¹³⁾。

シャールーニーによるアラビア語テキストは、かつてド・フーイェ (de Goeje) が「卑語と下品な言葉に満ちた」と評した『インド奇談集』を現在の一般読者にも十分理解出来るように¹⁴⁾、正則アラビア語に改めたものである。しかしそうした校訂作業は、『インド奇談集』が持っている〈海域共通アラビア語〉史料としての価値を失わせるものである、

と筆者は考える。J. ソヴァジェによる仏訳は、彼の『遺稿集 *Mémorial Jean Sauvaget*』(第1巻)の一部に収められたもので、序論・注釈とアラビア語テキストの部分については未完であるが、L.M. ドゥヴィク訳に見られる多くの誤訳を修正した点で高く評価されている。しかし彼の訳文もまた、『インド奇談集』の持つ独自のニュアンスとは大きく異なり、品位のある派手な表現方法が取られている¹⁵⁾。P. ケンネルの英訳と R.L. エールリッヒ (R.I. Ehrlich) のロシア語訳は、一般の読者を対象とした部分訳であって、簡単な注釈が付されているだけである。

最近の研究で注目されるのは、東アフリカ・イスラム史研究で名高い G.S.P. フリーマン・グレンヴィルによる『インドの驚異の書 *The Book of the Wonders of India*』と題する英訳本である。G.S.P. フリーマン・グレンヴィルは L.M. ドゥヴィク訳に多くの修正を施しただけでなく、その序論のなかで幾つかの新見解を提示した。従来の『インド奇談集』研究で重要な論争点は、その原本が編纂・著述されたのは何時のことか、著者ズブルクが実際に活躍した時代は何時か、また現存する孤本 A 本の筆写年代とその表紙に記された文字の解釈についてである。これらの点について、G.P.S. フリーマン・グレンヴィルは、以下のような結論を述べている。

11) 初めてのズブルクの校訂・訳注本は、1886年、パリで開催された第6回オリエンタリスト・コンGRESのために献呈された。しかし、この書は一冊本であるにもかかわらず、その発行年が1883~1886年となっている。

12) Excursion は〈余談〉の意味であるが、『インド奇談集』に現れるインド洋海域周辺の特異な地名について考証したもので、A から F までの6つの論文と1つの補遺が含まれている。また Excursion F では、M.J. de Goeje が「アラブ人たちに知られた日本」と題して、Wāqwaq が倭国、すなわち日本であるとの説を提示している ([Buzurk. ed. & trad., pp.295-307])。

13) 以上については、本論文「引用文献」のうちの [al-Kutubī. 1908], [al-Turayhī, M.S. 1987], [al-Shārūnī, Y. 1990], [Quennell, P. 1928], [Freeman-Grenville. 1981], [Sauvaget, J. 1954], [Ehrlich, R.I. 1959], [藤本勝次・福原信義 1978] を参照。

14) [Enc. Is. vol.1, p.570] を参照。

15) J. ソヴァジェは、スライマーンとアブー・ザイドによる『シナ・インド関係 *Relation de la Chine et de l'Inde*』に続いて、『インド奇談集』の新訳と詳しい注釈を予定していた。しかし彼の『遺稿集』に収められた『インド奇談集』は、その訳文のみで注釈は付いていない。彼の訳は、L.M. ドゥヴィク訳を大胆に改めた部分が多いが、必ずしも本来の意味を正確に伝えているとは言えない ([Sauvaget, J. 1954])。

①『インド奇談集』に収録された136種の逸話のうちで、年代を特定できるものは29種あって、その内でカリフ=ムクタディル (al-Muqtadir bi-'llāh, 在位908-32年)の治世代に関わるものが18種含まれており、それ以前に溯るものは3種に過ぎない。900~953年の年代枠を越えるものはわずかに1種 (L.M. ドゥヴィク訳の第40話に当たる)である。以上のことから判断して、ブズルクが活動していた時代は900~953年の約50年間に特定され、彼がペルシャ湾の国際港スーラーフに生活していた当時、その港に集まる船乗りたちからさまざまな海の驚異譚を収集・記録した¹⁶⁾。

②A本の奥付に記された日付について、V. リースはヒジュラ暦404年第1ジュマダー月17日 (1013年11月24日)と判読した。しかし、A本の表紙中扉の装飾文字のなかに、シリアのダマスカスにあるアーディリーヤ学院 (al-Madrasat al-'Ādiliya) について言及した記事があることから、奥付の日付は404年ではなく、604 (1207/08) 年と修正して読むべきである。なぜならば、アーディリーヤ学院とはアイユーブ朝のマリク・アルアーディル (al-Malik al-'Ādil, 在位1196-1218) によって建設されたマドラサを指している。ブズルクが活動した最後の年代である953年からアーディリーヤ学院に納められた1207/08年まで—G.S.P. フリーマン・グレンヴィルはヒジュラ暦604年に対応する西暦を誤って1246年とした—の間の写本の所在については不明である¹⁷⁾。

以上のG.S.P. フリーマン・グレンヴィルによって指摘された2点について、筆者の見解を述べてみたい。A本の表紙中扉には、次のような内容が記されている。「ヒンドーその陸地、その海とその島嶼—の驚異の書、

アルラーム・フルムズ出身のナーフダーフ、ブズルク・ブン・シャルリヤールの作品で、いと高きアッラーのもとでの貧しき僕 (ファキール)、崇高なるアーディリーヤ [・アビー・バクル・ブン・アイユーブ・ブン・シャージーー・ブン・マルワーン] の^{きづ}気付において、守備されたるシリア (ダマスカス) で [筆写されたものである]。いと高きアッラーよ、彼を称えん! (Kitāb 'Ajā'ib al-Hind: Barr-hu wa Baḥr-hu wa Jazā'ir-hu wa allafa Buzurk b. Shahriyār al-Nākhdah al-Rām Hurmuzī bi-rasm al-faqīr ilā Allāh ta'ālā al-'Ādiliyat al-'alā'iya [Abī Bakr b. Ayyūb b. Shādhī Marwān] bi-Shām al-Maḥrūs a'azza-hu Allāh ta'ālā)」

以上の文中に記された「崇高なるアーディリーヤ (al-'Ādiliyat al-'alā'iya)」を、G.S.P. フリーマン・グレンヴィルは「アーディリーヤ高等学院 (al-Madrasat al-'Ādiliya)」と解釈したが、必ずしもそのマドラサを指したのではなく、むしろアイユーブ朝のダマスカスの支配者であったマリク・アルアーディル・サイフ・ウッディーン I 世 (al-Malik al-'Ādil Sayf al-Dīn Abū Bakr Muḥammad b. Ayyūb b. Shādhī b. Marwān, 在位1196-1218年)、もしくはマリク・アルアーディル・サイフ・ウッディーン II 世 (al-Malik al-'Ādil Abū Bakr Sayf al-Dīn b. al-Malik al-Kāmil, 在位1238-40年) のいずれかであろう¹⁸⁾。とくにマリク・アルアーディル I 世は、ダマスカスにアーディリーヤ大高等学院 (al-Madrasat al-'Ādiliyat al-Kubrā) を創設した人物として知られ、ヌアイミー (al-Nu'aymī) によれば、612年 (A.D.1215/16)、その建設が開始された。そして615年 (A.D.1218/19)、マリク・アルアーディル I 世が死ぬと、その遺体はアーディリーヤ大高等学院内にある彼の墓に

16) [Freeman-Grenville. 1981, p.xviii] を参照。

17) *Ibid.* pp.xviii-xix.

18) [Enc. Is. 7/274] を参照。

بم الكتاب والمدرسة وصلواتنا على سيدنا محمد وآل محمد
 عمادنا وراي عمه السيرة المباركة ولها الكاتبة بالرحمة
 والصلوات والحسب الممل وكذا الوفاة شايخ عزتة جوار الاول
 سرته بعبارة
 كبة محمد الغنطان



アヤ・ソフィア本 f.95b に記された添え書き

移されたという¹⁹⁾。従って、1215/16年から1218/19年の間に、この写本がアーディリーヤ大高等学院に所蔵されたと推論することも可能である。続く表紙文中の大括弧 [] の部分は、文字が不鮮明なために判読することが難しいが、おそらくマリク・アルアーディル I 世の名前であるアビー・バクル・ブン・アイユーブ・ブン・シャーズィー・ブン・マルワーン (Abī Bakr b. Ayyūb b. Shādhī b. Marwān) と補って読むべきであろう。

さて、A 本の f.95b と巻末部の f.96b の 2 カ所に、同一の筆跡で「[書写の] 完成は、404 年第 1 ジュマダー月 17 日 (1013 年 11 月 24 日)。ムハンマド・ブン・アルカッターン (Muḥammad b. al-Qaṭṭān) がそれを書いた²⁰⁾」との添え書きがある。この部分は本文の美しいナスヒー体とは異なった拙い書体で記され、とくに年号の部分の解読がきわめて難しい。従って、これまでの研究ではその読みを 404, 580, 644, 704 など、諸学者の間で意見が分かれている²¹⁾。筆者は、書体から判断してこれを V. リースと同じく「404 年

(arba'at [wa] arba'mi'at)」と読むのが妥当であると考え²²⁾。そして後述するように、本来、上下 2 冊本であった『インド奇談集』原本が 1 冊に合綴された時に、新しく表紙の部分だけが作られたのであろう²³⁾。つまりその表紙は、アーディリーヤ高等学院が作られた時に、スルタン=マリク・アルアーディル・サイフ・ウッディーン I 世の名の下に『インド奇談集』が同学院の図書館に納められたことを明記するために書かれた、と推論されるのである。

なお A 本の表紙欄外に見られる後世の人の書込みと印章の文字によって、A 本はその後、ムフスィン・ブン・イーサー (Muḥsin b. 'Īsā) なる人物が一時所有し、さらにオスマン朝のスルタン=マフムード I 世 (Maḥmūd I, 在位 1730-54 年) のワクフ財産に帰属していたことが分かる。

A 本による『インド奇談集』は、編者・著者のブズルクがインド洋を股にかけて活躍するナーホダー、ルッバーン²⁴⁾や船乗りたちから聞き取った海の驚異に関する逸話を収録

19) [al-Nu'aymī (ed.). vol.1, pp.360-362] を参照。

20) 藤本・福原訳では、この部分を「……写字生ムハンマド・イブン・タッターン」としているが、明らかに誤っている ([藤本勝次・福原信義 p.140])。

21) [Buzurk (ed. & trad.). preface, pp.viii-ix] を参照。

22) 写本ではハムザ・アリフを取って、rba'at wa rb'miya と書かれている。

23) 後述 8, 18-19 頁を参照。

24) ルッバーン (rubbān) の語源は、ペルシャ語の rah-bān (道を守る人、案内人、旅人) であると考えられる。紅海では、ルッバーンは船を先導する水先案内人の意味に使われた (例えば, [Buzurk /

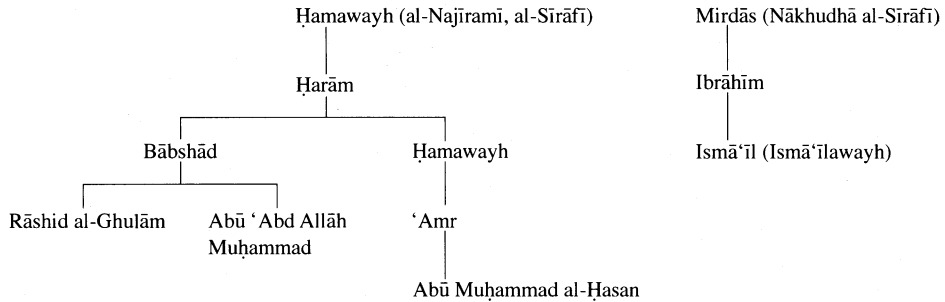


図1 Sirāfの著名なナーホダーの家系図

したもので、全部で136種が収められている（仏訳者L.M. ドゥヴィクは、不注意にも第46話と第81話の番号を二重に用いたので、話の最終番号は134話となっている）。注目すべき点は、136種の逸話のうちで、イラクのバスラ、オマーンのスハールやインドのサイムール (Ṣaymūr)²⁵⁾などで聞き取った逸話も一部に含まれるが、その大部分がシーラーフの港で直接採集されたことである。特に、情報提供者として、シーラーフ出身の著名なナーホダーのアブー・アブド・アッラー・ムハンマド (Abū 'Abd Allāh Muḥammad) から19種、彼の従兄弟に当たるアブー・ムハンマド・アルハサン (Abū Muḥammad al-Ḥasan) から17種、さらにイスマーイーラウイフとして知られた当代随一のナーホダーのイスマーイール (Ismā'il b. Ibrāhīm b. Mirdās) から7種と、3人の合計が43種にもなり、全体の136種の逸話のうちの約3分の1を占めていることは、編者・著者であるブズルクがシーラーフの港と深く関わった人物であることを示している (図1を参照)。

また、『インド奇談集』第77話の最後部に「以上で、第1巻 (al-juz' al-awwal) が終わり、

次にニヤーン島の報告が第2 [巻] に続く。もし、いと高き神が望み給うならば……」²⁶⁾と、また第106話では「インドでは、呪術師や魔術師がおり、彼らの業については世間広く知られており、私はすでにその一部について、この [第2] 巻 (hādthā al-juz') で話しました」²⁷⁾とある。以上の説明からも明らかのように、現存するA本の『インド奇談集』とは異なって、本来の『インド奇談集』原本は第1巻と第2巻に分かれていたと考えられる。そしてA本の第1話から第72話までの第1巻に相当する部分が全体の分量の3分の2以上を占めており、第73話から第136話までの後半部分の分量が残りの3分の1に過ぎないというアンバランスな割合であることは、後半の一部がある時期に散逸したために、もともと2巻本であったものが1巻に纏められたのではないかと、との推測が可能となるのである。この事実は後述するように、U本にはA本の第136話に続いて、さらに17種の別の逸話が収録されていることから明確に裏付けることが出来る²⁸⁾。

↗ (ed. & trad.). p.196] を参照)。しかし『インド奇談集』では、数艘の船を所有する船主であったり、嵐の際、乗員の命を救うために投荷や帆柱を折る決断を下す船の最高責任者であったりするので、ナーホダーと同じ意味に使われていることが分かる。

25) オマーンのスハールとインド西海岸のサイムール (Ṣaymūr, Chaul) は、いずれもシーラーフの重要な海外居留地であった ([家島彦一 1993, pp.70-71, 95-96])。

26) [Buzurk (ed. & trad.). text, p.125] を参照。

27) *Ibid.* text, p.157.

28) 後述18-19頁を参照。

2. ウマリー本『インド奇談集』 について

筆者は1971年、イスタンブルのヌール・オスマニエ図書館 (Nür Osmaniye Library) 所蔵の地理書・旅行記に関するアラビア写本を調査した際に、ウマリー編纂による百科全書『大都市を持つ諸王国についての洞察の道筋』(全27巻)の内の第1巻と第2巻が所蔵されていることを知った。そしてウマリーの書の第2巻の一部に、10世紀のインド洋交易史に関する貴重な記録史料が含まれていることに注目した筆者は、取りあえずその部分をマイクロ・フィルムに収めた。しかし当時、それがズルク・ブン・シャフリヤール『インド奇談集』の一部であると同定することが出来ずに、したがってそれ以上の追究をせずに放置したままになっていた。

最近、F. セズギン (Fuat Sezgin) 編纂による「イスラム写本復刻叢書 (Publications of the Insititute for the History of Arabic-Islamic Science, Series C: Facsimile Editions)」のなかに、ウマリーによる上述の百科全書全巻の写本が収録された²⁹⁾。そこで再度、第2巻所収のインド洋交易史に関する記録を読みなおした時、その内容が他ならぬズルク・ブン・シャフリヤール『インド奇談集』に符合するものではないか、と推論するに至った。

周知の通り、ウマリーの正式の名前はシハブ・ウッディーン・アフマド・ブン・ヤフヤー・ブン・ファドル・アッラー・アルウマリー (Shihāb al-Dīn Aḥmad b. Yaḥyā b. Faḍl Allāh al-'Umarī) といい、1301年、ダマスカスに生まれた。彼は、カルカジャンディー (al-Qalqashandī) やスワイリー (al-

Nuwayrī) と並ぶマムルーク朝時代の三大百科全書家の一人として知られ、1349年に死去した。彼の著述・編纂した書『大都市を持つ諸王国についての洞察の道筋』は、自然地理・天文・動植物誌・人物誌・事件史などに跨がる全27巻 (sifr) の膨大な大百科事典である³⁰⁾。

F. セズギンによって復刻・公刊されたウマリーの書全27巻のうちの第2巻は、現在、イスタンブルのスレイマニエ図書館に所蔵されている写本 (Ms. 2227, Yazma Bağışlar, Sülaymaniye Library, Istanbul) に依っている。第2巻第3章は「海洋とそれに関連することについて」であり、さらに第3章は3つの節 (faşl), つまり「第1節：海の記載について」、「第2節：4つの風の説明とコンパス図について」、「第3節：陸上および海上における驚異の一部の事柄の説明について (al-faşl al-thālith fī dhikr nubdhat min al-'ajā'ib barran wa baḥran)」に分かれている。問題となるU本は第3章第3節に含まれた部分であって、その全体の頁数は53頁 (pp.175-227), 1頁21行 (最初の頁だけは見出し行を入れて5行)、全文が美しいナスヒー書体によって記されている。

U本の第3節の記述方式は、例えば「ナーフザー (ナーホダー) のイスマール・ブン・イブラーヒーム・ブン・ミルダースが私に語って曰く… (ḥaddatha-nī Ismā'īl b. Ibrāhīm b. Mirdās al-nākhudhā ... qāla ...)」³¹⁾、あるいは「ムハンマド・ブン・パーブシャーズ、イスマール・ラワイフおよび船乗り仲間たちが語って曰く… (qāla ḥaddathanī Muḥammad b. Bābshādh wa Ismā'īlawayh wa jamā'at min al-baḥrīyīn

29) [al-'Umarī (Ms.)] を参照。

30) ウマリーについては、さしあたって [al-'Umarī (Ms.), vol.1, pp.v-xi] のF. セズギンによる序文および [Enc. Is. vol.3, pp.758-759] を参照。ウマリーの百科全書全27巻の揃いの写本は、現存していない。F. セズギンはトプカビ・サライ、ヌール・オスマニエ、スレイマニエなどの図書館に分散して所蔵されている各巻の写本のなかから、良質の写本を選んで、27巻の完本を編集した。

31) [al-'Umarī (Ms.). vol.2, p.179] を参照。

…)」³²⁾のように、情報提供者の名前を明示した上で、著者によって採集された逸話が記録されているが、一つひとつの逸話に見出し、段落や区切りはない。こうした記述形式は、A本とも一致している。V. リースの方式に倣って、U本の第2巻第3章第3節に含まれている逸話を分類すると、全体で77種の逸話が収録されていることが分かる。A本は137種を収録しているの、U本はそれに対して約5分の3の分量に相当する。

第3節の見出し部分(175頁17行目の大文字)、つまり「第3節：陸上および海上における驚異の一部の事柄の説明について」に続く冒頭部分には、序に当たる説明は一切なく、次のような文章で始まる。

「[確かな情報を伝える]信頼のおける人たち(al-thiqāt)が引用することとして、以下のことがある。シャリーフ=アリー・アルカルバライー(al-Sharif ‘Alī al-Karbalā’ī)が私に語って曰く。私がシナのある港に着くと、そこに一艘の[大]船が錨を下ろしており、その船を遠くから見た人は[余りの大きさに]紛れもなく一つの町のように思えた。そこで私はその船の船員たちのもとに行き、船がどの程度のもの運べるのかと尋ねた。すると、彼らは“わしらが知っておることはただ、今回の航海では女たちを除いて、3,070人の男たちを運んだということだけじゃよ。しかも彼らのなかには130人の商人たちがおり、残りの者でも荷物を持参していない者はほとんどおらんかったよ”と答えた…。」³³⁾

以上は、イラクのカルバラ(Karbarā’)出身のシャリーフ=アリーなる人物がシナの港に着いた時に目撃した大型船(おそらく中国ジャンクを指している)のこと、また商人たちが莫大な資金と商品を持って来航するこ

と、港の権力者(al-sulṭān)³⁴⁾による輸入商品に対する関税額など、シナの港で目撃した驚異の事実について説明する。この第1話に当たる部分はA本には含まれないが、スライマーンが『シナ・インド情報』の中で記録しているハーソフ(広東)港でのシナ王(malik al-Ṣīn)の外国商人に対する貿易管理の説明と類似している。

次に、U本の第3節の最終部分(p.227, 17-21行)を見てみよう。そこには「さて以上[に述べた逸話]は、驚異譚(al-‘ajā’ib)に関して語られたことのすべての集成である。しかし、こうした類似の話について語るべきことは他にも多い故に、もし私がそれらの驚異譚についてどれとどれに真の価値があるかといったこと(はっきりとした方針)を決めたいやうで編纂を始めなかったならば、とてもそれらを[正しく]引用することは出来なかったであろう。なぜならば、そもそも海は海の数々の驚異譚を語る者や、またその摩訶不思議なこと(ghara’ib)を伝えようとする者に対して、決して[記録することを]邪魔したりすることはなかったにもかかわらず、[余りにも語るべき話が多過ぎるので、その真実なるものの選択に困って]病に呻き、重い負担に打ちつぶされるほどである。実際に、その東方諸地域は驚異について語るべきことは実に数多いのだが、ただただ真理を以て、[記述する上で]要旨を切り詰めることがより相応しく、また簡潔であることがより肝要である故に、その引用者にとって絶対に避けるべきことは、嫉そねみ心を持つ無知な者や強情に私見を言い張る智者から[の無駄な干渉]である」とあって、本節に含めるべき海の驚異譚が余りに多いので、選択に難しかったことを指摘して、本節を終えている。

32) *Ibid.*, p.181.

33) *Ibid.*, pp.175-176.

34) ここでのスルターン(sulṭān)は、権威者、権力者の意味であろう。港における船の出入港、商品の売り買い、外国人の管理などを司る役人のことで、スライマーンとアブー・ザイドの記録では、王(malik)とある。おそらく市舶司のことであろう([Sulaymān & Abū Zayd (ed.). p.44])。

表1 『インド奇談集 *Kitāb al-‘Ajā’ib al-Hind*』に記された年号

[Aya Sofia 本] (A 本)		[al-‘Umarī 本] (U 本)	
番号	年号 (ヒジュラ暦/西暦)	番号	年号 (ヒジュラ暦/西暦)
1	A.H. 270/A.D. 883-84	3	A.H. 270/A.D. 883-84
1	A.H. 288/A.D. 900-01		
9	A.H. 300/A.D. 912-13		
61	A.H. 300/A.D. 912-13	25	A.H. 300/A.D. 912-13
109	A.H. 305/A.D. 917-18		
37	A.H. 306/A.D. 918-19		
114	A.H. 306/A.D. 918-19		
90	A.H. 309/A.D. 921-22		
10	A.H. 310/A.D. 922-23		
32	A.H. 310/A.D. 922-23	11	A.H. 310/A.D. 922-23
83	A.H. 317/A.D. 929-30		
85	A.H. 317/A.D. 929-30		
49	A.H. 325/A.D. 936-37	21	A.H. 325/A.D. 936-37
		63	A.H. 330/A.D. 941-42
33	A.H. 332/A.D. 943-44	12	A.H. 332/A.D. 943-44
129	A.H. 334/A.D. 945-46		
29	A.H. 339/A.D. 950-51		
127	A.H. 340/A.D. 951-52	53	A.H. 340/A.D. 951-52
95	A.H. 342/A.D. 953-54		
		63	A.H. 350/A.D. 961-62
		68	A.H. 361/A.D. 971-72
		67	A.H. 367/A.D. 977-78

[表1] では、U本に収録された76種の逸話の内、情報が採録された年号を明記したものをだけを取り出し、A本と比較したものである。この表によって明らかなように、年号を明記した逸話はA本では17種、U本では10種あって、最も古い年号はA本ではヒジュラ暦270年 (A.D.883-84)³⁵⁾、U本も同じく第3話のヒジュラ暦270年 (A.D.883-84)、また最も新しい年号はA本では第95話の342年 (A.D.953/54)、U本では第67話の367年 (A.D.977/78) である。なお、最も新しい年号が記されたU本の第67話はA本には収録されていない。U本の第67話には、次のように記されている。「この私自身、367年にカラにおいて盗賊(海賊)の首領で、その名前

がラクバン (Rakban) なる人物を見たことがある。彼は海上において暴虐を極め、[人々に] 大変な恐怖を与えた。それに類する彼に関する[数々の恐ろしい] 噂話が語られ続けていたが、結局、彼は盗賊から足を洗い、サルブザ王の安全保護のもとに降った…³⁶⁾とある。

カラ (Kalah), またはカラフ・バール (Kalah Bār) は賈耽の『皇華四達記』には箇羅国とあり、マライ半島の南西海岸に位置した交易港で、現在のマレーシアのケダ州ブジャン渓谷 (Bujang Valley) にその遺跡が点在する。9・10世紀のカラは、ベルシャ湾と中国を結ぶインド洋航海の中間拠点であり、またスマトラ、ジャワやインドシナ半島の各地

35) A本の第1話には、2つの年号が見られる。一つは情報提供者のアブー・ムハンマドがスィンドのマンサーラ (al-Mansūra) に滞在していた288年 (A.D.900/901) に、そこの町の長老からこの話を聞いたこと、そして他の一つはその逸話のなかで、ラー王が270年 (A.D.883/884) にマンサーラの知事に書簡を送った、とある ([Buzurk (ed. & trad.). text, pp.2-3])。

36) [al-‘Umarī (Ms.). vol.2, p.220].

から集まる熱帯産の香木・薬物・染料・錫・金などの取引市場として殷盛を極めた³⁷⁾。サルブザ (Sarbuza) は7～11世紀に栄えた王朝で、スマトラ島南東部に拠り、都はパレンバンにあった。9世紀のサルブザはマラッカ海峡を支配し、カラはその従属下にあったと思われる。

興味深い点は、第66話、第67話、第68話の3つの逸話がいずれも著者自身の経験談であることにある。第68話では、「私が目撃したカラの驚異の事柄として以下のことがある。…この私は、カラで夏と冬を過ごしたことがある。…361年(971/72年)に、私はカラに滞在していた。私はそこを出てバンジャラーン(後述するように、明らかにベンガルを指す)に向けて出発し、バンジャラーンの海岸にあるカルブ(Karb, Kurb, Kadub)に着いた³⁸⁾。なぜならば船がそこで浅瀬に乗り上げてしまったからで、人々(船の乗組員)はバンジャラーンの入江から来る真水(夏期の洪水による水量)が増加するまでの約2カ月間をそのまま留った…³⁹⁾とある。これらの記事によって、著者が971/72年から977/78年までの間、カラとベンガルを何度か訪問し、とくに971/72年の夏と冬にはカラで過ごしたことが分かる。以上の逸話は、いずれもA本には全く採録されないので、U本の持つ独自の史料価値を示すものであるといえる。

ここで注目すべきことは、U本に記された最も新しい年号が367年(977/78年)であり、それ以後の記録が一つもないという点で

ある。実は、この367年はスィーラーフの町の歴史にとっては極めて重要な年であった。つまり366(976/77)年、もしくは367(977/78)年は、スィーラーフの町が大地震に襲われて壊滅的な被害を受けたために、それ以後再興することがなかった運命の年として広く知られていた。この事件を伝えるムカッダッスィー(al-Muqaddasi)の記録を引用してみよう。

「スィーラーフは、ダイラム[・ブワイフ朝]が支配するや[次第に]衰退し、彼らスィーラーフの人々は代わってオマーンの[スハールに隣接して]居留地(qaşba)を建設した。その後、366(976/77)年、もしくは367(977/78)年に地震が起こり、その地を襲い、7日にわたって余震が続いた。そこで彼ら住民は海に避難したが、その建物の大部分は破壊され、めちゃめちゃになった。この大事件は、[それ以後、]物事に対して慎重に熟慮のうえで行動しようとする人(思慮深い人)や過去のことに教訓を得て他人に警告しようとする人に[スィーラーフが享受していたような華々しい繁栄は長続きしない、栄枯盛衰についての]好例を提供することとなったのである⁴⁰⁾とある。

U本に採録された逸話の最終年号が367年であることと、ムカッダッスィーの伝えるように大地震によるスィーラーフの崩壊の366年、もしくは367年という年号との一致は、偶然のことであろうか。これまでの説明を通じて、ナーホダーであったブズルクがインド洋における航海活動の拠点としたのはスィーラーフであり、また彼の情報提供者の多くが

37) カラ(Kalah), カラバール(Kalahbār), カラフ・バール(Kalah Bār)と呼ばれた。おそらく紀元前後の頃から12・13世紀のころまで栄えたマラッカ海峡に沿った交易港。[Rahman, N.H.S. & Yatim, O.M. 1990, pp.1-9], [家島彦一 1993, pp.76-80]を参照。

38) バンジャラーン(Banjālan)という言い方は、ウマリーの書にのみに見られ、他の同時代の史料にはない。後述するように、バンジャラーンはアラビア語でベンガル地方を指すバンジャラ(Banjāla)の古い言い方であると考えられる。後述23-24頁を参照。カルブ(Karb), クルブ(Kurb), カドブ(Kadub)については不詳であるが、明らかにベンガル湾の最奥部、ガンジス・デルタの先端部に位置した港。後述24頁を参照。

39) [al-'Umarī (Ms.). vol.2, pp.220-221].

40) [al-Muqaddasī. pp.426-427]を参照。

シーラーフ出身の船主、ナーホダーや船乗りたちであったこと、しかも航海談の採集地がシーラーフ、もしくはシーラーフの海外居留地のスハール、バスラやインドのサイムールであったことなどが明らかとなった。これらの事実を総合して推測出来ることは、①366年、もしくは367年の大地震によって、他の多くのシーラーフ出身の船乗りたちと同様に、ズルクの航海活動は終わった、②ムカッダッシーが述懐したように、ズルクはかつてのシーラーフの人々によるインド洋での華々しい活躍の歴史を後生に伝えるために、彼らの語る航海談を集録・編纂した、③ズルクが航海談を集録したのはシーラーフが崩壊した直後のことであり、その場所はおそらくシーラーフではなく、避難先のナジーラム、オマーンのスハールか彼の生まれ故郷のフージスターンの町ラームフルムズであった、④アッバース朝時代のバグダードとペルシャ湾・インド洋を股にかけて活躍した船乗り・海上商人たちの語る海の冒険談や奇異談は、10世紀後半以後、いわゆる「驚異談（アジャーイブ）」としてモスクに集まって談話する人たち（al-masjidūn）や物語師たち（quṣṣās）に好まれて伝承された⁴¹⁾、などの諸点である。

3. アヤ・ソフィア本とウマリー本との内容比較

〔表2〕は、A本に含まれる136種とU本に含まれる77種の逸話について、記載順に「番号」を、またそれぞれの逸話の概要を示す見出しに相当する「内容」を付けて相互に比較したものである（なお写本には、逸話の番号や見出しは一切記されていないため、筆者が表を作成するために便宜的に付けたものである）。まず、逸話の総数のうえでは、U本はA本のほぼ5分の3に過ぎない。両本

に収録された逸話の内容が一致する場合、あるいは一部に異同があっても明らかに同一の逸話を伝えたと考えられるものについては表の左右同一の行に並べ、点線は両本に対応する逸話が見出せない場合を示す。例えば、A本の第1話とU本第3話とは逸話の内容が一致する。またU本の第1話、第2話と第6話はA本に該当する逸話がなく、A本の第4話、第5話、第7話、第9話～第28話はU本には収録されていないことを示す。

〔表2〕を見てまず明らかな点は、A本とU本に見られる逸話で相互に共通するのは53種あって、その配列順序は次の3つの逸話を例外として、他のすべてが一致することである。つまり、A本の第115話「ジンの出る市場」、第116話「不思議な石」と第117話「イエメンの明礬」は、U本の第45話、第43話、第44話のそれぞれの内容に対応しているが、両本の配列順序は異なっている。このようにA本とU本に採録された逸話の配列順序と内容がほぼ一致することは、他ならぬ両本が同じ原本である『インド奇談集』の一部を伝えた写本であることの証左であると言えるのである。

そこで次にA本とU本の内容の異同について、さらに詳しく考察してみよう。A本の冒頭部分には、19行にわたって著者自身によると思われる序文が付され、そこではコーランの章句を引用して、創造主としてのアッラーの偉大さが繰り返し讃えられている。一方、U本では第2巻第3章第3節の見出しの「陸上および海上における驚異の一部の事柄の説明について」に続いて、「信頼のおける人たち（al-thiqāt）が引用することとして…」とあって、突然に第1話が始まる。

〔表2〕を見ると、A本に採録されているがU本に見られない逸話は、A本の第4話、第5話、第7話、第9話～第28話、第31話、第35話、第40話～第43話、第45話、第48話、

41) 例えば [Enc. Is. vol.1, pp.203-204] を参照。

表2 [Aya Sofia 本] と [al-'Umarī 本] との内容比較

[Aya Sofia 本] (A 本)		[al-'Umarī 本] (U 本)	
番号	内 容	番号	内 容
	1	シナの港に到着の船客数と持参商品
	2	人魚の島
1	密かにイスラム教に改宗したインド王	3	密かにイスラム教に改宗したインド王
2	低地カシュミールの祭礼	4	低地カシュミールの祭礼
3	サランディープの市場と大仏殿	5	サランディープの市場と大仏殿
	6	インド人貴族たちの中の姦通の習慣
4	インド・カンヌージュ地方の女	
5	お化け蟹	
6	船の錨を挟む巨大蟹	7	船の錨を挟む巨大蟹
7	ワークワーク諸島の奴隷狩り	
8	巨鳥に乗って生還した船乗り	8	巨鳥に乗って生還した船乗り
9	巨大魚	
10	別の巨大魚	
11	巨大魚に穴を開けられた船	
12	指輪を飲み込んだ魚	
13	魚の不思議な習性	
14	女人の島	
15	人魚の住む島	
16	鋸を持った大魚	
17	魚に裁かれた罪人	
18	大亀の島	
19	サランディープの王	
20	人間に似た魚	
21	ザルムと言う人間に似た魚	
22	鳥に似た魚	
23	不知火の海	
24	タンニーンと言う大蛇	
25	インドの毒蛇	
26	船の帆柱ほどの大蛇	
27	大嵐からの生還と神による恵み	
28	家畜を食う蛇	
29	象を食う大蛇	9	オマーンの蛇川に住む毒蛇
30	目が合っただけで死ぬ猛毒の蛇	10	目が合っただけで死ぬ猛毒の蛇
31	空飛ぶ毒蝎	
32	捕らわれたザンジュ王の流浪の旅	11	捕らわれたザンジュ王の流浪の旅
33	ザンジュの占い師による予言	12	ザンジュの占い師による予言
34	巨鳥の羽軸	13	巨鳥の羽軸
35	毒を持つ巨鳥	
36	スファアラに住む象を食う巨鳥	14	スファアラに住む象を食う巨鳥
37	カリフに贈られた巨大蟻	15	カリフに贈られた巨大蟻
38	人面の果実をつける大木	16	人面の果実をつける大木
39	巨大猿の群れ	17	巨大猿の群れ
40	雌猿に誘惑された船乗り	
41	猿と黄金	
42	家事を手伝う猿	
43	鍛冶屋で火吹きを手伝う猿	
44	鷹に仕返しした利口な猿	18	鷹に仕返しした利口な猿
45	情事をとりもつ猿	
46	牧夫から船長になったアブハラの生涯	19	牧夫から船長になった人物の生涯
47	熟練船乗りの航海術	20	熟練船乗りの航海術

48	シナにある磁石山	
49	紅海での海難事故	21	紅海での海難事故
50	海難で助けられた幸運な赤子	
51	バラカを買った敬虔な籠造り職人	22	バラカを買った敬虔な籠造り職人
52	船長の肖像画	
53	巨鳥の羽軸で作った水槽	
54	巨鳥の肉を食べて若返った船乗りたち	
55	ファールと言う巨大魚	23	ファールと言う巨大魚
56	マート島の不思議	
57	ミフラン川の流れ下り	
58	インドの妖術師	
59	スィンダープーラの妖術師と鱷	
60	鳥の言葉を解するインド人とその予言	24	鳥の言葉を解するインド人とその予言
61	海上商人ユダヤ教徒のイスハーク	25	海上商人ユダヤ教徒のイスハーク
62	シナにおけるユダヤ人の商売	
63	バルバラ海の危険	
64	サランディープのグップ海の危険	
65	インド人の奇習	26	インド人の奇習
66	サランディープ王の行幸	
67	小便を清浄なものとするインド人	27	小便を清浄なものとするインド人
68	インド人の用便と浄めの方法	28	インド人の用便と浄めの方法
.....	29	寺に寄進された女性との交わり
69	サランディープにおける関税の徴収	
70	インドの毒蛇	30	インドの毒蛇
.....	31	蛇の毒を消す薬テリアカ
71	サランディープの毒蛇と呪い師	
72	入水自殺する老婆	
73	入水自殺を介護する人	
74	海を渡った仏像	
75	サリーラ（サルプザ）の猿人	
76	ラームリー島の麒麟（ザラーファ）	
77	尻尾のある人食い人種	
78	ニヤーン島の人食い人種	
79	頭蓋骨を通貨とする人食い人種	
80	敵人を食らう人たち	
81	ランジュパールース島の住民	
82	カシュミールにあるダイヤモンドの谷	32	カシュミールにあるダイヤモンドの谷
83	海賊から逃れて幸運な帰還	
84	ある魚を食べて精力絶倫になった老人	33	ある魚を食べて精力絶倫になった老人
85	サランディープの航海で大儲けした人	
86	シナ王の庭園	34	シナ王の庭園
87	アンダマーン島の黄金寺院	
88	ヤティーマの大真珠	35	ヤティーマの大真珠
89	ザーバジュの町の市場	
90	ある女の語る母と子の数奇な運命	36	ある女の語る母と子の数奇な運命
91	水夫と若い娘	
92	サイムールのフナルマン	
93	シナ官吏のハーンフー入城儀式	
94	標識を付けた木材の漂着	
95	船の遭難と投げ荷	
96	インド人の我慢競べ	
97	インド人の髪形	
98	海亀を食べて夜盲症を患う	
99	ザーバジュの龍涎香	37	ザーバジュの龍涎香
100	ザーバジュ島の火山	38	ザーバジュ島の火山

101	インドの盗賊	39	インドの盗賊
102	誘拐
103	老人を焼く風習
104	ザーバジュ王の面前での座り方
105	サランディープの行者たち
106	インドの呪術師による予見
107	呪文を掛けられた鱶
108	インドでの窃盗罪
109	ベルジャ湾の荒波
110	インド人の奇習	40	死肉と鼠肉を食べるインド人の食習慣
111	シナ王と真珠池	41	シナ王と真珠池
112	ワークワークの島々
113	飼い馴らされた象	42	飼い馴らされた象
114	海難事故
115	ジンの出る市場	45	ジンの出る市場
116	不思議な石	43	シナの不思議な石
117	イエメンの明礬	44	イエメンの明礬
118	ハースィクの乳香	46	ハースィクの乳香
119	神への誓い文を文様に刻む花	47	神への誓いを文様に刻む花
120	眼薬となる石蟹	48	眼薬となる石蟹
121	ブジャのエメラルド	49	エメラルドと黄金の仏像
122	風の無い季節に雛を育てる大鳥
123	皮を剥いても生きていた若者
124	サマンダルと呼ばれる火の鳥	50	サマンダルと呼ばれる火の鳥
125	ワークワーク島に住む雌雄両性の兎	51	ワークワーク島に住む雌雄両性の兎
126	スファアラに住む両性のトカゲ	52	スファアラに住む両性のトカゲ
127	鱶を飲み込んだ大蛇	53	鱶を飲み込んだ大蛇
.....	54	ワークワーク諸島の位置と広がり
128	ワークワーク諸島とその住民	55	ワークワーク諸島とその住民
129	ワークワーク人によるザンジュ侵掠
.....	56	イエメンに住むワークワークの工人
130	サリーラ (サルブザ) の町
131	黒人の人食い
132	スファアラの巨鳥	57	ザンジュの巨鳥
133	泥沼の海
134	宝石の島サランディープ	58	宝石の島サランディープ
135	難破した人の苦難な旅	59	難破した人の苦難な旅
136	ワークワーク諸島で遭難	60	ワークワーク諸島で遭難, シナに漂着
.....	61	樟脳樹について
.....	62	インドのバナラスにおける少年の曲芸
.....	63	サルブザ王の全財産を貰い遭難した男
.....	64	他人の財産を横領したために船が沈没
.....	65	サイムールとスィラーフの間の航海
.....	66	ザーバジュの海賊によるカラの町襲撃
.....	67	カラを襲った海賊の首領, 著者の経験
.....	68	カラとバンジャラーンでの著者の経験
.....	69	サランディープ島の猿の階級社会
.....	70	トカゲの鳴き声で来船と来客を予知
.....	71	スマトラ島バクタクの首狩り族
.....	72	サンフの市場で買い物をする飼い馴らされた象
.....	73	インド国の商慣行, 借金返済の方法
.....	74	インドにおける火葬の風習
.....	75	スィンダープールの人々の火葬
.....	76	精霊の住む樟脳の老木への動物供儀
.....	77	バンジャラーンのムスリム居留地

第50話、第52話～第54話、第56話～第59話、第62話～第64話、第66話、第69話、第71話～第81話、第83話、第85話、第87話、第89話、第91話～第98話、第102話～第109話、第112話、第114話、第122話、第123話、第129話、第130話～第131話、第133話、の計83話である。一方、U本に採録されているがA本に見られない逸話は、U本の第1話、第2話、第6話、第29話、第31話、第54話、第56話、第61話～第77話、の計24話である。

以上、A本とU本との内容を比較・分析することによって、次のような両本の記載内容の違いと特徴が明らかとなる。

① A本にはU本の冒頭部分（第1話～第2話）と最後部分（第61話～第77話）に連続して欠落する逸話がある。

② U本はA本の前半（第9話～第28話）および中程（第52話～第54話、第56話～第59話、第62話～第64話、第66話、第69話、第71話～第81話）を省略している反面、冒頭部分と最後部分についてはA本に未収録の逸話が見られる。

③ 以上のことから、現存するA本は、ある時期にその冒頭部分と巻末部分が散逸したのではないかと推測される。この推測を裏付けるのは、先にも述べたようにA本第77話の最後部分に「以上で、第1巻 (al-juz' al-awwal) が終わり、次にニヤーン島の報告が第2 [巻] に続く。もし、いと高き神が望み給うならば…」と明示された第1巻の終りまでの分量が現存するA本全体の3分の2を占めており、続く第2巻の残りの部分が著しく少ないという事実である⁴²⁾。

このように、U本はA本に比べると抜粋部分が多いが、A本では欠落した部分、特に後半部分を伝える極めて貴重な史料であると言えるのである。

さらにA本とU本に収録された逸話を細部にわたって検討すると、明らかに両本が同一の逸話を収録しながらも、その内容に微妙な違いが見出だされる場合がある。例えば、A本の第1話は密かにイスラム教に改宗したインドのラー王⁴³⁾についての逸話であり、これと同じ内容の逸話はU本の第3話に収録されている。A本の第1話は「バスラにおいて、ナジーラム出身のアブー・ムハンマド・ブン・アルハサン (アルフサイン)・ブン・アムル・ブン・ハマワフ・ブン・ハラーム・ブン・ハマワフがわれわれに語ってくれたインド (ヒンド) に関することの一つとして、以下のことがある。私は288年 (900/01年) にマンスーラにいましたが、その時、その町の信頼のおける長老の一人が私にこんな話をしてくれました。ラー王—彼はインド地方の諸王のなかで最も強大であり、彼が [治めて] いる地方は上カシュミールと下カシュミールとの間にあって、王はマフルーク・ブン・ラーイク (Mahrūk b. Rāyiq) と呼ばれていた—は、270年 (883/84年) に、マンスーラの太守—彼はアブド・アッラー・イブン・ウマル・ブン・アブド・アルアズィーズのこと—のもとに書簡を送って、自分のためにイスラム法をインド語 (al-Hindīya) で注釈してくれるよう依頼したのです…」⁴⁴⁾とある。

一方、U本の第3話を見てみよう。「さてアブー・イムラーン・ムーサー・ブン・ラバーフ・アルアウシー (Abū 'Imrān Mūsā b. Rabāḥ al-Awsī) がイフシード朝のカーフル (Kāfur al-Ikshīdī) のために作成した書—『諸海とその驚異の情報およびそれに関連したことの真正集 (al-Ṣaḥīḥ min Akhbār al-Biḥār wa 'Ajā'ib-hā wa mā yata'allaqu bi-dhālika)』と呼ばれた—のなかで述べている

42) 前述8頁を参照。

43) ラー (Rā) は、サンスクリット語のラージャー (rāja) の意 ([Hobson-Jobson. p.754]。)

44) [Buzurk (ed. & trad.). text, pp.2-3] を参照。

ことについて言うと、ラー王—彼はインドの諸王のなかで最も強大であり、彼が〔治めて〕いる地方は上カシュミールと下カシュミールとの間にあって、王はマフルーク・ブン・マーリク (Mahrūk b. Māliq)⁴⁵⁾と呼ばれていた—は、270年に、マンスーラの大守—彼はアブド・アッラー・イブン・ウマル・ブン・アブド・アルアズィーズのこと—のもとに書簡を送って、自分のためにイスラム法をインド語で注釈してくれるよう依頼したのでした…⁴⁶⁾とある。

上述のA本とU本の内、下線部分については文章が完全に一致している。但し、A本では、第1話はナジラム出身のアブー・ムハンマドを通じてバスラにおいて採録されたことが明記されている。ところがU本では、同じ逸話(第3話)はアブー・イムラーン・ムサー・ブン・ラバーフ・アルアウスイーなる人物がイフシード朝のカーフルのために作成した書から引用したものであると説明されている。

カーフルは、言うまでもなく黒人奴隷で宦官のアブー・アルミスク・カーフル・アッラービー (Abū al-Misk Kāfur al-Lābī) のことで、イフシード朝のムハンマド・ブン・トゥグジュ (Muḥammad b. Ṭughj al-Ikshīd) に買われた後、945年にエジプト遠征の司令官として参加した。946年、ムハンマドの没後、ウヌージュール (Ūnūjūr, 在位946-61年) とその弟アリー (‘Alī, 在位961-66年) が相次いで王位に即位したが、アリーの没後、カーフルは966年から968年までの間、イフシード朝の実権を握った⁴⁷⁾。

また『諸海とその驚異の情報およびそれに関連したことの真正集』の著者であるアブー・イムラーン・ムサー・ブン・ラバーフ・アルアウスイーとは、おそらくアブー・

イムラーン・ムサー・ブン・ムハンマド (Abū ‘Imrān Mūsā b. Muḥammad) と同一人物であり、ジャーヒズ (al-Jāhīz) と同じく〈バスラのモスクに集まって談話する仲間たち (al- Maṣjidūn)〉として知られた古典散文学の学者仲間の一人であった⁴⁸⁾。しかしアブー・イムラーンによる著書は現存せず、その全体の内容がどのようなものであったか、またズルク『インド奇談集』の内容とどのように関わっているかについて、明らかにすることは出来ない。

さらに、もしU本の第3話がアブー・イムラーンによって著された『諸海とその驚異の情報およびそれに関連したことの真正集』からの引用であるとするならば、その他のU本に収録された76種の逸話についてもすべてアブー・イムラーンの書からの引用であったのか、それともズルク・ブン・シャフリヤール『インド奇談集』の原本—この書名で呼ばれていたとは断定出来ないが、明らかに現存するA本とは異なる—からの引用であったのか。これらの問題について、幾つかの可能性が考えられる。その一つの可能性は、アブー・イムラーンが『インド奇談集』の一部を引用して、『諸海とその驚異の情報およびそれに関連したことの真正集』を著したことである。他は、ズルクはスィーラーフの町が地震によって崩壊する以前に『インド奇談集』(原本A)を一度著わし、977年直後の頃、第1巻と第2巻から構成された原本Aの改訂本(原本B)を再度作成したのではないかと推測されるのである。前者の説の蓋然性は、ほとんど考えられない。なぜならば、アブー・イムラーンの書はイフシード朝のカーフルが没する968年より以前に著され、一方、U本に収録された逸話の最新の年号は977年であるためである。後者の説では、

45) A本の Mahrūk b. Rāyīq がU本では Mahrūk b. Māliq と替えられている。

46) [al-‘Umari (Ms.). vol.2, p.177] を参照。

47) カーフルについては [Enc. Is. vol.4, pp.418-419] を参照。

48) *Ibid.* vol.6, p.709.

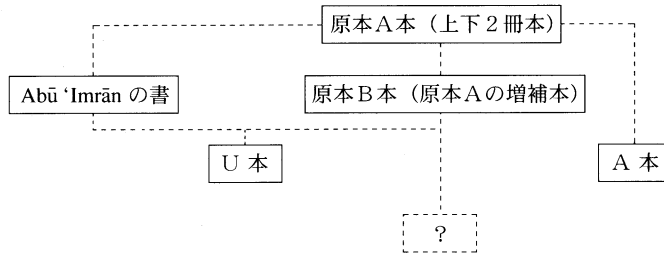


図2 A本とU本の写本系統

アブー・イムラーンが利用した『インド奇談集』は原本Aであり、それは968年より以前に流布していたものと考えられる。原本Bでは、原本Aの後半部にブズルク自身の航海での体験、とくに971/72年から977/78年の間に、何度かカラとベンガルを訪問した時の情報が付け加えられたことになる。可能性としては、後者の説の方が蓋然性が高い(図2を参照)。

以上に加えて、ブズルク『インド奇談集』の改訂版は977/78年以後に原本Bとして纏められたが、一つの定本が存在したのではなく、収録された逸話の内容を簡略にしたり、語句・順序に多少の異同を加えた別本が幾つも流布し、また原本A系統の別本も引き続き存在していたと考えられるのである。以上の推論が正しいとするならば、アイユーブ朝時代にスルタン=マリク・アールディルの気付(bi-rasm)によって編纂されたA本の『インド奇談集』は明らかに原本A系統の一写本であり、一方、ウマリーの百科全書『大都市を持つ諸王国についての洞察の道筋』のなかに引用されたU本は原本B系統の一写本を利用しながら、さらにA系統の逸話を伝えるアブー・イムラーンの書を参照して、ウマリー自身の『インド奇談集』要約本として編纂されたと考えられるのである。

以上の説明からも明らかのように、A本とU本は同じ内容の逸話を伝えていても、情報提供者の名前、地名や内容の省略・増補など、さまざまな異同が見られる。その具体例として、次の2つの逸話を挙げて比較してみたい。

A本の第32話とU本の第11話は、奴隷商人に捕らわれたザンジュの王がオマーン、バスラ、バグダード、メッカ、エジプトなどの諸地方を流浪した後、ナイル川を溯って故国のザンジュの国に再び帰還するまでの数奇な旅を綴った長文の逸話である⁴⁹⁾。A本によると、「イスマーイーラウイフが船乗り仲間たちと一緒に、以下のような話を私にしてくれたのですが、310(922/23)年、彼は自らの船に乗ってにオマーンを出ると、カンバルフ(Qanbaluh)⁵⁰⁾を目指しましたが、激しい嵐になり、船はザンジュのスファール(Sufalat-Zanj)に押し流されてしまったのです。ナーフザー曰く…」とあって、この逸話の情報提供者はイスマーイーラウイフと船乗り仲間たちであったと述べている。一方、U本の同一部分は「ムハンマド・ブン・バーブシャーズ、イスマーイーラウイフと信頼に足る情報の提供者である船乗りたちの一団が以下のような話を私にしてくれたのですが、310年、ザンジュのナーフザーの一人が自らの

49) [Buzurk (ed. & trad.). text, pp.50-60], [al-'Umarī (Ms.). vol.2, pp.181-184] を参照。

50) カンバルフ(Qanbaluh)はカンバルー(Qanbalū)に同じで、スィーラーフ商人たちの訪れる東アフリカ海岸の最も南に位置する交易港。おそらくベンバ島を指している(家島彦一1991, pp.89, 118)。

船に乗ってオマーンを出ると、カンバルフ(Qanbaluh)を目指しましたが、風が船を運び、彼をスファアラのザンジュに押し流してしまったのです。曰く…」とあって、下線の部分はA本には見られない。

またA本の第46話には「船乗りやナーフザーたちにまつわる数々の言い伝えのなかに、水先案内人アブハラ (‘Abhara) についての話があります。彼はキルマーン生まれで、その牧場で羊を飼育していたのですが、その後、漁師になり、インド通いの船による水夫となり、やがてシナ船 (markab Šinī) に乗換え、そして、水先案内人となったのです…」とある。これと同じ逸話を伝えたのは、U本の第19話であり、次のように記されている⁵¹⁾。「船乗りやナーフザーたちにまつわる数々の言い伝えのなかに、水先案内人マーファンナ (Māfannā) についての話があります。彼はナジールム⁵²⁾の生まれで、その村々の一つで羊を飼育していました。その後、漁師になり、インド通いの船の水夫の一人となり、やがてシナ船に乗換え、その後、水先案内人となったのです…」

以上のA本とU本の逸話は明らかに同じ内容を伝えたものであるが、話の主人公の名前がA本ではアブハラ、U本ではマーファンナー、また彼の出身地も一方がキルマーン、他方がナジールムとなっており、相互に名前と地名が異なっている例である。この場合、いずれの情報が正しいかを定めることは難しい。

4. インド洋交易史研究における ウマリー本の史料的价值

U本の最大の史料的价值は、A本に収録

されていない24種の逸話 ([表2] の第1話、第2話、第6話、第29話、第31話、第54話、第56話、第61話～第77話) にあるが、その他にU本とA本が同じ逸話を伝えている場合でも、U本の方がより詳しい記録を残していることがあり、さらにA本の随所に見られる欠落文字 (V. リースの校訂本では […]) で示されている) をU本によって補うことが出来る例 (V. リース本の p.54/1, p.61/1, p.77/7, p.93/8, p.131/6 など) がある。同じ逸話を伝えながらU本の方がより詳しい記録を残している例としては、特にU本の第23話、第27話、第33話と第38話が挙げられる。

また同じ逸話を伝えていても両本間の内容に大きな異同が見られる例として、A本の第128話とU本の第55話、第56話がある。A本の第128話では、ワークワーク島人について、彼らが334 (945/46) 年に約1,000艘の小舟 (qārib) に乗ってカンバルフ (Qanbaluh/Qanbalū) の町を襲い、つぎにザンジュのスファアラ (Sufāla) の村や町を略奪した、と語られている。一方、U本では、ワークワーク島を実際に訪れたことのある人からの情報として、その島の位置と広さを述べた後 (第54話)、その住民の顔つきがトルコ人と似ており、技術工芸に優れ、性格は狡賢いこと (第55話)、またイエメンに滞在するある商人の伝える話として、ワークワーク出身の召使たち (ghulām) に鍛冶の技術を教えたところ、その内の一人が鉄器や銅器をみごとに造るようになったこと、そこでその主人はアデンの対岸にあるアフリカ側のザイラウ (Zayla‘) に行き、複数のワークワーク人を獲得した (第56話) とあって、より詳細な内容となっている。

ワークワーク島民は、マダガスカル島に移

51) [Buzurk (ed. & trad.). text, pp.85-90], [al-‘Umarī (Ms.). vol.2, pp.187-189] を参照。

52) ナジールム (Najiram) は、スィーラーフの西に位置し、風向きや潮流の都合でスィーラーフに入港することが難しい時、またスィーラーフが地震の被害によって壊滅した時にも利用された港 ([al-Muqaddasī. p.427], [Yāqūt. vol.4, p.764], [Le Strange. pp.258-259, 296], [家島彦一 1991, p.116])。

住したマレー系の人々を指しており、アラビア語史料では一般にはクムル人 (al-Qumr, ahl al-Qumr), あるいはワークワーク人 (ahl Wāqwāq) として知られた⁵³⁾。13世紀のイブン・アルムジャーウィルは、クムル系の人々がアデンに到着したことを伝えて、「626 (1228/29) 年、クムルからの船が1艘、この [クムル～キルワ～ムガディシュエ～アデンに至る] モンスーン航海のルートに乗ってアデンにやってきた。その船はクムルを出ると、キルワを目指し、つづいてアデンに投錨したのである。彼らの船には、舷外浮材 (アウトリガー型のカヌーのこと) が付いていた」と述べている⁵⁴⁾。もし、U本に収録された逸話が10世紀半ばに起こった史実を伝えたとしたならば、疑いもなくマレー系の人々によるアデン移住に関する最も古い史料であり、他の史料に見られない貴重な記録と言える。

さて [表2] によって明らかかなように、U本の最後部分の第61話から第77話までの17種の逸話は、A本には全く含まれない極めて史料的価値の高い記録である。そこで以下では、その一つひとつの概要と幾つかの重要な点を指摘してみたい。

A本に記された最後の逸話は第136話であり、それはU本の第60話の内容とほぼ一致する。A本によると、サリーラ (サルプザ) とシナとの間をサンブーク船で航海したことのある船乗りたちの一人の話として、彼らはサリーラから50ザーム (zām)⁵⁵⁾ の距離のところで時に襲われて漂流し、ワークワーク島の一つに上陸した。島民の一人を通じてサンフ (Šanf, Champa) に至る海路を問い質し、船に飲料水を満たして15ザームの航海で無事にサンフに到着した、とある。これをもって

A本はすべての記載を終わるが、U本ではこれに続いて、漂流した船乗りたちはワークワーク島民から情報を得て、船を操り苦難の末にシナに辿り着いた経緯を詳しく述べている。ワークワーク島からシナに至るまでの漂流の記録は、A本には全く見られない部分である。

第61話：イブン・アルアキース (Ibn al-Akīs) なる人物を通じて伝えられた樟脳樹 (kāfur) の説明と、ファンズール島民による樟脳交易についての逸話。情報提供者のイブン・アルアキースは明らかにイブン・ラーキース (Ibn Lākīs) の誤写で、A本の第127話では「以下は、一般にはイブン・ラーキースの名で知られたジャウファル・ブン・ラーシド (Ja'far b. Rāshid) が私に語ってくれた話である。彼は黄金の国 [通い] の水先案内人の一人であり、著名なナーホダーたちの一人でもある……」⁵⁶⁾とあって、彼による逸話は第120話、第132話と第133話にも伝えられている。

第62話：アブド・アルワーヒド・ブン・アルハサン・アルファサウィー (‘Abd al-Wāhid b. al-Ḥasan al-Fasawī) が語ったインドのバナラス (Banaras) で出会ったイスラム教徒の少年曲芸師の話。バナラスはインドのガンガー川沿いにある宗教都市ベナーレス (Benares, Vārāṇasi) のことであろう。ベナーレスがムイッズ・ウッディーン・ムハンマド (Mu‘izz al-Dīn Muḥammad b. Sām) によって最初の略奪を受けたのは1193年のことであるが、ビールニー (al-Bīrūnī) はすでに1020年頃にこの町のことをバーナーラス (Bānāras) として伝えている⁵⁷⁾。従って、U本に収録されたこの記事はビールニーの記

53) [Ferrand, G. pp.277-538], [Enc. Is. vol.5, pp.379-381] を参照。

54) [Ibn al-Mujāwir. vol.1, p.117] を参照。

55) ザーム (zām, azwām) は、航海における時間の単位で、3時間毎に交替する見張り時間のこと。8ザーム、すなわち8交替が1日に当たる ([Tibbetts, G.R. 1971, p.527])。ここでは50ザームとあるから、16～17日の航海距離ということになる。

56) [Buzurk (ed. & trad.). text, p.178] を参照。

57) al-Bīrūnī. p.200; Enc. Is. vol.1, pp.1165-1166.

録よりも80年ほど遡り、イスラム教徒たちによるペナーレス征服以前の様子を伝えた最も古い史料とも言える。またファサー(Fasā)出身のアブド・アルワーヒド・ブン・アルハサンは、A本の第97話に登場するアブド・アルワーヒド・ブン・アブド・アッラフマーン・アルファサウィー(‘Abd al-Wāhid b. ‘Abd al-Rahmān al-Fasawī)と同一人物であると考えられる。

第63話：350(961/62)年にシャーハーン・ブン・ハマワイフ(Shāhān b. Ḥamawayh)を通じて伝えられた逸話。シャーハーンは商人アフマド・ブン・マルワーン(Aḥmad b. Marwān)と協同で船を仕立て、カラ、ファンズールを経て、サルブザに着いた。その王は戦闘に赴く時に、所有している財産のすべてを焼却する習慣があった。そのことを知ったシャーハーンとアフマドの2人は、言葉巧みに王から宝物庫にあったものをもらい受け、330(941/42)年、船に積み込むとラーフリー(ラームリー)⁵⁸⁾、ハルクンド(Harkand)⁵⁹⁾を通過したが、途中で嵐に襲われた。そこで積荷を海に捨て6カ月間の漂流の末、インド西海岸のターナの入江(Khūr Taṅa)⁶⁰⁾に着いた。その時、シャーハーンは仲間の商人アフマドがオマーンで死んだとの情報を得た。そこで、財宝を独り占めしたシャーハーンは船を仕立てて出航したが、またも大嵐に遭い、すべてが海の藻屑と化し、ターナに戻った。この話は、数ある海の驚異談のなかでも、取分け珍しい体験談であるという。ハマワイフはアブー・ムハンマド・ハサンやアブー・アブド・アッラー・ムハンマドなど、数々の著名なナーホダーを輩出した

スィーラーフのハマワイフ家のことであり([表1]を参照)、また商人アフマド・ブン・マルワーンと同一の人物はA本の第61話の「海上商人ユダヤ教徒のイスハーク」に関する逸話のなかで、イスハークが麝香と布地を得た相手の商人の名前として登場する。

第64話：同じくシャーハーン・ブン・ハマワイフに関する話の後日談であり、ある船乗りを通じて私(著者ズブルク)が聞き取った話。シャーハーンは、ターナでアフマド・ブン・マルワーンが死亡したとの報に接すると、全財産を自分のものにしたいと考え、アフマドの遺族に遺産を引き渡したくなかった。しかし、シャーハーンの乗った船は沈没し、1粒のダイヤを除いて、総額10,000ディーナールに及ぶ全ての財産を失った。

第65話：びっこのスィーラーフの人、イブラーヒム・ブン・ムハンマド(Ibrāhīm b. Muḥammad al-Sirāfi al-A‘raj)がヤックラブ・ブン・ハウワーン(Ya‘qūb b. Ḥawwān)から伝え聞いた話。アラビア海の航海で、インドのサイムールからスィーラーフまでを18日間で横断し、スィーラーフに11日間滞在の後、帰路は13日間の航海でサイムールに再び戻ったこと。この話はA本の第114話「海難事故」と類似するもので、情報提供者も同一人物である。ただしA本では、サイムールからスィーラーフまでを18日間で横断したことは言及せず、306(918/19)年、3艘の船団でスィーラーフを出航してサイムールに向かう途中、11日の航海の後、到着を目前にして突然の暴風に襲われてすべての船が沈没したこと、この大海難事件が一つの契機となって、スィーラーフとサイムールの海上活動

58) ラーフリー(Rāhī)はおそらくラームニー(Rāmni)、あるいはラームリー(Rāmri)に同じで、趙如适『諸蕃誌』には藍無里の名で出てくる。スマトラ島の北端、バンダ・アチエの東側に位置した([Ibn Khurdādhbeh. pp.64-65], [Hūdūd. p.57])。

59) 9・10世紀のアラブの地理書・旅行記に記録されたハルクンド(Harkand)は明らかにベンガル湾を広く指した言葉であるが、その語源についてはサンスクリット語のハリケリーヤ(Harikeliya)、タミル語のアリカンドム(Arikandam)など諸説がある([Hūdūd. 241], [Sauvaget, J. 1948, p.35, note 2])。

60) ターナの入江(Khūr Taṅa)：インド西海岸のターナ湾(Gulf of Thana)のこと。

が衰亡したことを述べている⁶¹⁾。後半の海難事故については、U本には言及されていない。

第66話：カラで私（著者ブズルク）が聞き取った話。ザーバジュの海賊がカラの町を襲撃した時、カラの王、マイリーの子息バーナフ（Bānah b. al-Mayli, Bānah b. al-Mīli）はこれを迎え撃ち、全員を捕らえて処刑したが、その首領の首は刀や棍棒で打ち叩いても齒が立たず、家来たちが総出で叩き切り、やっと殺すことが出来たという。これは次の第67話と第68話に連続する逸話で、いずれも著者がカラとバンジャーラーン（ベンガル）に滞在中、現地を目撃した体験談である。

第67話：367（977/78）年に、カラで著者自身が目撃した第66話に続く話で、海賊の首領ルクバン（Rukban）は鉄（鉄製斧）で斬っても全く効き目が無い強靱な男であった。367（977/78）年はU本に記された最も新しい年号であり、一方、A本に収録された最も新しい年号は342（953/54）年であるから、それよりも25年近く時代が下がる。この記事と次の第68話によって、著者ブズルクが361（971/72）年から367（977/78）年にかけて、度々マレー半島のカラヤベンガル地方を訪問していたことが分かる。

第68話：361（971/72）年の夏季と冬季、著者ブズルクがカラで生活した時に経験した驚異の事柄。金山（Jabal al-Dhahab）に船が近づくと必ず地震のような豪雨と雷鳴がやって来るが、カラに船が入港するには安全な時であり、一方、カラの右側に見えるバナワ

ル山（Jabal Banawār）⁶²⁾の方から雷鳴を伴って豪雨が起ると、それに乗じて海賊たちが船を襲う。従って、カラの住民はバナワール山の方から雨が来て、雷鳴が聞こえると、小船に乗って海賊と戦うために出撃するが、金山の方から雷鳴と雨が来ても、船の入港に問題がない。著者は、そこからバンジャーラーンに向けて航海し、船が浅瀬に乗り上げたためにその海岸のカルブ（Karb）に着いた。船の人たちは、バンジャーラーンの入江（Khawr Banjalān）から来る真水（河水）が増加するまで、そのまま留まるという。増水すると、住民は小船に乗ってカルブからバンジャーラーンまでの7日行程の間を往き来する。その自然地理の状況はイラクのバターイフ（沼沢地）⁶³⁾やアフワーズとよく類似しており、しかもそこには葦が茂っているので、その様子はバターイフと寸分も違わない。人々は、バンジャーラーンまで来ると、そこに3カ月間滞在し、乾期になって大地が乾いてくると、道路を歩いて行く。葦は象やすべての家畜の餌となるので高価に売れる。ここで話は、再びサルブザに戻る。毎日、海岸に鰐が現れるので、人々はスルタンに訴えた。スルタンは学者達を集めて、その対策を討議した。バンクワー（al-Bankwā）なる男がこれを退治する秘法として、太鼓を打ち、入江の泥をさらうことを提案した。その方法を実行すると、鰐は水面から現れなくなった。ところが、スルタンはバンクワーを呼び出して、首を斬るように命じた。すると、再び鰐が現れ、人々を苦しめるようになったという。

61) [Buzurk (ed. & trad.). text, 168] を参照。

62) バナワール山（Jabal Banawār）はカラに船が入る時の目標となる山で、標高1,300メートルのケダ・ピーク（Kedah Peak, Gunung Jerai）を指している。例えば [Rahman, N.H.A. & Yatim, O.M. p.2] を参照。

63) バターイフ（al-Baṭā'ih）は、下イラクの低湿地帯を指す。ティグリス川とユーフラテス川の河水が合わさり、ペルシャ湾の水位とはほぼ同じなために、河水と海水とが混じり合い、広大な湖沼・水路・湿地が広がる。著者の出身地ラームフルムズもまたバターイフに近く、ティープ川の河畔の低湿地にある ([Le Strange, pp.41, 243, 247])。ベンガル地方はガンジス川、ジャムナー川やブラフマプトラ川などの無数の河川がベンガル湾に注ぐ低湿地帯であり、明らかに著者がバターイフとベンガルの両地の自然地理条件の類似性に注目したのであろう。

ここで極めて興味深い点は、著者ブズルクが訪れたというバンジャーラーンに関する記録である。バンジャーラーンは、12世紀末から13世紀のペルシャ語史料に現れるバンジャーラ (Banjāla) に同じで、ベンガル地方を指している。因みにマルコ・ポーロにはバンガラ (Bangala, Bangalla, Bagaliar) とある。ベンガルの地名を伝えた最も古い記録は11世紀のタンジョール・パゴダ (Tanjore Pagoda) の碑文中に見られるもので、そこにはヴァンガーラム (Vangālam) とある⁶⁴⁾。明らかにバンジャーラーン (Banjālān) の地名は、タンジョール・パゴダ碑文のヴァンガーラムに極めて近い。もしU本に現れるバンジャーラーンなる地名がヴァンガーラム、バンジャーラ、ベンガルと同一地名と考えるならば、すでに10世紀以前からあった固有のヴァンガ (Vanga) という名前と並んで、バンジャーラーンの地名が10世紀の後半の頃に使われていたことになる。ここに説明された記載の内容から判断して、バンジャーラーンがガンガー川とそれに合流するブラフマプトラ川諸分流の下流域およびその河口三角州からなる広大な低湿平地を指していることは明らかである。とくに著者ブズルクの出身地はベンガル地方と気候・風土や地形条件の似ているフジスターン地方のラームフルムズであるために、著者自身がバンジャーラーンとの共通性に興味を抱き、詳細な記録を残したのであろう。なおカルブ (Karb) については、おそらくサマタタ (Samatata, Sumatara)、あるいはフグリー川の河口の海港として古くから知られたタムラリプティ (Tamralipti, Tamluk) を指したと思われるが明らかでない。

第69話：30年にわたって海で生活したバスラ出身のアブー・アルアッバース・アフマ

ド・ブン・ムハンマド・ブン・ムーサー (Abū al-‘Abbās Aḥmad b. Muḥammad b. Mūsā al-Baṣrī) が語った話。アブー・アルアッバースの話は、同時にスィーラーフ出身のアリー・ブン・サイード (‘Alī b. Sa‘īd) 一般にはイブン・アビー・サフル (Ibn Abī Sahl)、もしくはイブン・サフル (Ibn Sahl) の名で知られた—やその他の人たちにも伝えられていた。彼らが述べていることによると、サルブザの入江近くに住む猿は、人が餌を与えると、猿たちのボスとその妻が最初にそれを食べ、その他の猿は近くに待機しており、人間社会の序列と同じであるとの話。10世紀の地理学者イブン・ハウカル (Ibn Ḥawqal) は、スィーラーフ出身のアブー・バクル・アフマド・ブン・ウマル (Abū Bakr Aḥmad b. ‘Umar al-Sirāfi) なる人が人生40年間をもっぱら船上だけの生活を送った、と述べている⁶⁵⁾。おそらくこの人物は、上述のアブー・アルアッバース・アフマド・ブン・ムハンマド・ブン・ムーサーと同一人物、もしくは同じ仲間の一人と思われる。またイブン・サフルについては、明らかにA本の第98話の情報提供者であるアリー・ブン・ムハンマド・ブン・サフル (‘Alī b. Muḥammad b. Sahl) と同じ人である⁶⁶⁾。

第70話：アフマド・ブン・ムハンマド・アルキナーニー (Aḥmad b. Muḥammad al-Kinānī) が私 (著者ブズルク) に語ったヤモリの鳴き声で船の来航を予測する逸話。アフマドはマンダリーファッタン (Mandarīfattan) なる場所で、そのペルシャ人の頭目であり政治的有力者 (ra‘īs al-Furs wa za‘īm-hum) アリー・ブン・ムハンマド・アッルウルウィー (‘Alī b. Muḥammad al-Lu’luwī) のもとで一緒に食事をしていた時、家の天井でヤモリがキーと鳴いた。アリーは

64) [Hobson-Jobson. pp.85-86], [Enc. Is. vol.1, p.1015] を参照。

65) [Ibn Hawqal. p.290] を参照。

66) [Buzurk (ed. & trad.). text, p.149] を参照。

その声を聞くと、間もなく船が到着し、いつもの来航時期に現れなかった人物がやって来るであろうと語った。食事を終えて、アフマドが自宅に戻ると、果たせるかなアリーが予測した通りに、ディーバージャート・アッダム (Dibājāt al-Dam) に住むアフマド・ブン・ムハンマド・アルマラウィー (Ahmad b. Muḥammad al-Malawī) がそこに現れた⁶⁷⁾。マンドラーファッタンは、A本の第74話に見えるマンドゥーリーン (Mandūrīn) と同一地名で、インド南端に近いマドゥライ (Madurai) のことであろう。またディーバージャート・アッダムは、マルディブ群島のマレ島のことを指していると思われる⁶⁸⁾。

第71話：第70話と同じくアフマドが語った別の逸話。ファンスール (Fanṣūr) にあるバラージャ (al-Balājah) と呼ばれる場所にはバータク (al-Bātak) とする首狩り族 (battār) が住む。彼らの財産・食料・道具類の [交換の] 手段は斬った人間の首であり、それが多ければ多いほど資産持ちであり、権力を握り、他の人から勇者として畏敬の念を持たれるという。従って、バータクの男は20人の首を取るまで妻を娶ることが出来ない。イブン・アルカッターン (Ibn al-Qaṭṭān) なる名前の偽医者 (al-mutaṭabbib) で、アブー・アルハイル (Abū al-Khayr) という尊称の人を通じて知ったことによると、首狩り族のある男は19人の首を取り、あと一人の首を狩るために山に入ったが、そこで出会ったのは自分の父親だけであった。そこで彼は父親の首を斬って20人分とし、一人の妻を娶ったという。首狩

り族に関する逸話は、A本の第78話「ニヤーン島 (Jazīrat Niyān) の人食い人種」と、それに続く第79話「ニヤーン島の先にあるバラワ (Barāwah) と呼ばれる3つの島の住民が人間の頭蓋骨を通貨としていることの説明」のなかに登場し、上述のU本第71話の内容とも一致する部分が見られる。特に、バラージャとバラワとは明らかに同一の地名であり、イブン・フルダーズベ (Ibn Khurdādhbeh) のバールース (Bālūs) と同一地名であると考えられる⁶⁹⁾。スライマーンの『シナ・インド情報』によると、ファンスール島 (Jazīrat Fanṣūr) の近くに位置するニヤーン島の住民は「彼らの内の誰かが結婚を望む時には、彼らの敵たちの男の頭蓋骨を持ってこなければ結婚出来ない。もしその者が敵を2人殺せば、2人の妻を娶ることが出来る。こんな具合に、もしその者が50人を殺せば、50個の頭蓋骨で50人の女と結婚する [ことが出来る]。その [奇習の起こりの] 理由は、彼らの敵人が多いため、[他の仲間] より数多くの敵人を殺した者がいると、彼らはその者により強い畏敬の念を抱くようになったことにある」⁷⁰⁾とある。この記事は、U本が伝える内容ともほぼ共通している (ただし、U本では、一人の妻を娶るには20人の首が必要であるという)。なおバータクとはスマトラ島の首狩り族として古くから知られたプロト・マレー系のバタク (Batak) を指しており、趙如适『諸蕃誌』には拔沓、1430年頃に記録されたニコロ・コンティ (Nicolo Conti) にはバテク (Bathech) とある⁷¹⁾。も

67) [al-'Umari (Ms.). vol.2, pp.223-224]. なお、マドゥーラについては、[Hobson-Jobson. pp.534-535] を参照。

68) ディーバージャート (Dibājāt) はマルディブ群島を指す。アッダム (al-Dam) については明らかでないが、マルディブ群島最南端のアッド環礁 (Add Atoll)、もしくは環礁を意味するアトール (atoll) のことであろう。ここでは後者の意味に解釈し、マルディブ群島の中心の島マレ・アトール (Mahal Atoll) とした。マルディブ群島については、とりあえず [Enc. Is. vol.6, pp.245-246] を参照。

69) [Ibn Khurdādhbeh. p.66] を参照。

70) [Sulaymān & Abū Zayd. p.32] を参照。

71) [趙如适 上巻, p.13], [Hobson-Jobson. p.74]

し、これが事実とするならば、この逸話はバタク族の首狩りの風習を伝えた最も古い史料といえよう。

U本の第71話のなかで注目すべき点は、イブン・アルカッターン (Ibn al-Qaṭṭān) という名前の偽医者についてである。実はイブン・アルカッターンなる人物は、次に述べるA本の巻末にも登場する。

「[以上をもって、] 本書は完結した。讃えあれ、唯一なる神、アッラーに！ われらが主ムハンマド、彼の家族と教友たちのうえに平安あれ！ アッラーよ、祝福されたこの稿本 (hādhā al-nuskha) を読まれる方々のために罪を許し給え！ また稿本の筆者 (kātib-hā) とすべてのイスラム教徒たちへのアッラーのご慈悲とご祝福を祈り給え！ [書写の] 完成は、404年の第1ジュマダー [月] 17日 (1013年11月24日) のことなり。ムハンマド・ブン・アルカッターン (Muḥammad b. al-Qaṭṭān) がそれを記せり。」

このムハンマド・ブン・アルカッターンは、果たして上述のイブン・アルカッターンと同一人物であろうか。もしムハンマド・ブン・アルカッターンと偽医者 (al-mutaṭabbib) イブン・アルカッターンとが同一人であるとすると、次のことが推測される。第71話はおそらくブズルクがカラに滞在した361年 (971/72) から367年 (977/78) の間に収集されたと考えられるので、それから35～42年後になって、ブズルクの知人であったムハンマド・ブン・アルカッターンが『インド奇談集』の原本をもとに一写本を作成した。あるいはブズルクが収集・編纂した逸話集を、1013年11月24日にムハンマド・ブン・アルカッターンは『インド奇談集』として筆記したことも考えられる。

第72話：サンフに到着した船の一人のた

ちが語った逸話。その市場では象が茄子・玉葱・野菜など必要なものの買い物を行い、必要な金を支払って戻る。この話が真実かどうかを確認するために、著者ブズルクは直接彼らに尋ねたところ、各々の家には買物、水汲み、薪運びなどを行う象がいるとのことである。この記事によって、著者ブズルクはサンフを訪れたことがあったと考えられる。インドにおいて、馴らされた利口な象が子安貝を使って八百屋で買物したり、掃除や水を撒いたりする話はU本の第42話およびA本の第113話にも共通して見られるが、ここでは特にサンフの象について言及されている⁷²⁾。

第73話：インドにおける慣行の一つ。人に金を貸した場合、その金を確実に返済させる方法として、人前で王の名前を大声で唱えること。これと同じ逸話は、14世紀のイブン・バットゥータの記録にも伝えられている⁷³⁾。

第74話：インドにおける慣行と伝統について。インド全域において見られる慣習の一つに、焼身自殺がある。焼身自殺の動機は、自らの主張を貫くためとか、危機に陥った時、憤慨に耐えない時、あるいは王からの命令によるためとか、いずれの場合も自ら生きながらにして火葬されることを選んだ者は、その当日の3日前から一定の儀式が行われる。そうして火葬された者は死後40日間の喪が明けると、その霊は犬・ロバ・牛・象などの動物に転生する。彼ら住民は、王からのいかなる命令に対しても絶対服従である。

第75話：ある人がスィンダーブール (Sindābūr)⁷⁴⁾ で目撃したインド人の火葬の状況についての驚異談。前述の第74話と別の事例が語られている。

第76話：伝え聞いた驚異談の一つとして、樟脳樹には靈魂が宿っており、それを切り倒す時には伐採者はその樹木の根元に一晩か二

72) [Buzurk (ed. & trad.). text, p.192] を参照。

73) [Ibn Baṭṭūṭa. vol.3, pp.411-412] を参照。

74) スィンダーブール (Sindābūr, Sandābūra) はインド西海岸の港で、ゴアの南80キロメートルに位置した。[Enc. Is. vol.9, p.638] を参照。

晩寝泊まりして、夢のなかに現れる樹木の精霊の言葉を聞く。その結果、伐採することが決まると、伐採の当事者は水牛もしくは羊・犬・豚などの動物を屠り、その血を樹木に注いだ後に伐採をするという。この逸話は、樹木に霊的な力や生命力が秘められていると考えるマレー世界の超自然観を伝えたものであろう。

第77話：伝え聞いた情報の一つで、バンジャラーン（ベンガル）にはイスラム教徒たちの総督（wali）であり、同時に彼らの裁判沙汰や紛争事の管理・監督人（nāzir）のザイド・ブン・ムハンマド（Zayd b. Muḥammad）なる人物がいた。彼のもとから派遣されたジャワーマルド（Jawāmarḍ）という男は、夜間、ある一団に襲撃されて、片足を斬られた。その報告がザイドのもとに届いた時、丁度、著者ブズルクもそこに居合わせた。ザイドの判断に基づいて、現地人と事を余り荒立てず、平和裏に解決しようとしたが、その後もたびたび仲間のペルシャ人たちがインド人に襲われる事件が起こった。その土地の統治者（al-sultān）が大軍を率いて川辺を渡ろうとした時、丁度、ザイドの仲間たちが丸太で縛られ、張付けにされているのを目撃した。そこで、その統治者は盗賊たちを捕らえ処刑した。この事件を通じて、統治者は、土地に居住するザイドとその仲間のペルシャ人たちが寛容で友好的な態度をもち続けていることに感激したという。この逸話は、バンジャラーンにあった外国商人の居留地とその管理責任者、現地人との対立や商取引をめぐる問題について考える極めて重要な史料を提供している。

以上、U本に独自の記録の概要を紹介し、同時にそれらの史料の価値について幾つかの私見を述べた。考慮すべき一つの大きな問題は、U本だけに収録されたインド洋の船乗り、水先案内人（ルッパーン）、ナーホダーや海上商人たちの話が果たして10世紀の記録であるか否かということである。これまでの

検討によって明らかなように、それぞれの逸話に現れる年代、情報提供者の名前や地名などがいずれもA本と共通性があり、逸話の記述形式についても両者は一致する。ただし、U本だけに見られるカラに近い黄金の島、バナワール山、バンジャラーン、カルブ、バナラス、バータク（al-Bātak）という首狩り族（battār）などの地名は、同時代の他の史料には全く登場しない情報であって、もしこれらの読み方と解釈が正しいとするならば、U本の持つ史料の価値はさらに高まるであろう。

5. 結びに代えて

筆者は、現在、A本とU本とを突き合わせて、相互の記載内容を比較・検討しながら、『インド奇談集』の新しい校訂本の作業を進めている。この作業には、以上の両本だけに止まらず、ほぼ同時代の内容を含むスライマーン、アブー・ザイド、マスウーディー、またイドリースィー（al-Idrīsī）、ヤークート（Yāqūt）、イブン・バットゥータ（Ibn Baṭṭūṭa）やイブン・マージド（Ibn Mājid）などの後代の記録史料とも比較・検討し、記載内容について詳細に分析することが必要となる。

特に重要な点は、本稿の冒頭部分でも触れたが、『インド奇談集』には当時のインド洋海域世界の国際語とも言える文字化された〈海域共通アラビア語〉と称せられるような〈俗語アラビア語〉によって記録され、しかもインド洋を舞台とした船乗り、ナーホダーや海上商人たちが常用していた特殊な航海用語や造船用語、海上貿易における商業形態・取引商品・商慣習、さらには船乗りたちの生き生きとした海上生活などに関する具体的な記録を含んでいることにある。以上の諸点から考えて、『インド奇談集』は10世紀のインド洋海域世界の具体的な状況を伝える最も貴重な史料であると言えよう。

引用文献

- Brockelmann, C. *Supple.* 1937. Carl Brockelmann. *Geschichte der Arabischen Literatur, Supplementband, 1.* Leiden. p.409.
- al-Bīrūnī (ed. & trans.). 1879. *Alberuni's India.* ed. & trans. by E. Sachau. London. (repr. Delhi: S. Chand & Co. 1964.).
- Buzurk (Ms.). Buzurk b. Shahriyār. *Kitāb 'Ajā'ib al-Hind Barr-hu wa Baḥr-hu wa Jazā'ir-hu.* Manuscript: Süleymanie Library, Aya Sofia Ms. No.3306, Istanbul.
- Buzurk (ed. & trad.). 1883-1886. P.A. van der Lith & L. Marcel Devic (ed. & trans.). *Livre des Merveille de l'Inde par le capitaine Bozorg fils de Chahriyār de Rāmhormoz.* Leiden: E.J. Brill.
- Enc. Is. Encyclopaedia of Islam.* 1986-1997. vol.1-9. Leiden: E.J. Brill.
- Ehrlich, R.I. 1959. Buzurk ibn Shahriyār. *Ādesa Indii (Wonders of India).* Moskwa: Akademie Nauk.
- Ferrand, G. 1913-1914. Gabriel Ferrand. *Relation de voyages et textes géographiques arabes, persan et turcs relatifs à l'Extrême-Orient.* 2 vols., Paris.
- . 1919. Gabriel Ferrand, G. "Le K'ouen-louen et les anciennes navigations interocéaniques dans les mers du sud," *Journal Asiatique*, 2e serie. t. 13, pp.239-364, 431-492, t.14, pp.5-68, 201-242 (ed. Fuat Sezgin. Gabriel Ferrand, *Études sur la géographie arabo-islamique.* vol.1. 1986. Institut für Geschichte der Arabisch-Islamischen Wissenschaften an der Johann Wolfgang Goethe-Universität, Frankfurt am Main.)
- Freeman-Grenville. 1981. G.S.P. Freeman-Grenville (ed. & trans.): *The Book of the Wonders of India.* London & The Hague: East-West Publications.
- Hobson-Jobson.* 1886. H. Yule & A.C. Burnell. *Hobson-Jobson.* London. New edition edited by William Crooke. Delhi: Munshiram Manoharlal. 1969.
- Hūdūd* (trans.). 1938. *Hūdūd al-'Ālam (The Region of the World).* trans. & commentary by V. Minorsky. London.
- Ibn Ḥawqāl (ed.). 1967. *Kitāb Šurat al-Ard.* ed. by J.H. Kramers. Bibliotheca Geographorum Arabicorum, 2 vols. Lugduni Batavorum. Leiden: E.J. Brill.
- Ibn al-Mujāwir (ed.). 1951, 1954. Ibn al-Mujāwir. *Šifat Bilād al-Yaman wa Makka wa ba'd al-Ḥijāz (Descriptio Arabiae Meridionalis),* ed. Oscar Löfgren. 2 vols. Leiden.
- ak-Khawli (Ms.). 'Abd Allāh b. Mirzā Muḥammad al-Khawli (copyist). Buzurk b. Shahriyār. *Kitāb 'Ajā'ib al-Hind Barr-hu wa Baḥr-hu wa Jazā'ir-hu.* Manuscript: Bibliothèque National, Ms. Arabe No.5958 (Schefer Collection, No.9655), Paris.
- Ibn Khurdādhbeh (ed.). 1889. *Kitāb al-Masālik wa'l-Mamālik.* ed. M.J. de Goeje. Bibliotheca Geographorum Arabicorum, vol.6. (repr. Lugduni Batavorum. Leiden: E.J. Brill).
- al-Kutubī. 1908. al-Ḥājj Muḥammad Amīn Darbāl al-Kutubī (ed.). *Buzurk b. Shahriyār. 'Ajā'ib al-Hind Barr-hu wa Baḥr-hu wa Jazā'ir-hu.* Cairo: Maṭba'at al-Sa'āda.
- Le Strange. 1905. *The Lands of the Eastern Caliphate.* Cambridge: Cambridge U.P.
- Lith, van der. 1885. Van der Lith, "Discours sur l'importance d'un ouvrage du Xme siècle intitulé Kitāb 'Agayib al-Hind [title in Arabic] ou Livre des Merveilles de L'Inde," *Actes du Sixième Congres International des Orientalistes tenu en 1883 à Leide. Quatrième Partie. Section 5: Polynésienne.* Leiden, pp.1-19.
- al-Mas'ūdī (ed. & trad.). 1861. *Murūj al-Dhahab (les prairies d'or),* text et traduction par C. Barbier de Meynard et Pavet de Courteille, tome 1.
- al-Muqaddasī (ed.). 1877. *Kitāb Aḥsan al-Taqāsīm fī Ma'rifa al-Aqālīm,* ed. M.J. de Goeje. Bibliotheca Geographorum Arabicorum, vol.3. Leiden: E.J. Brill.
- al-Nu'aymī (ed.). 1948, 1951. 'Abd al-Qādir b. Muḥammad al-Nu'aymī al-Dimashqī. *al-Dārus fī Ta'rīkh al-Madāris.* ed. Ja'far al-Ḥusnī. Dimashq: Maṭbū'at al-Majma' al-'Ilmī al-'Arabī bi-Dimashq.
- Quennell, P. 1928. Peter Quennell, *The Book of the Marvels of India.* trans. into English, London: G. Routledge & Sons Ltd.
- Rahman, N.H.S. & Yatim, O.M. 1990. Nik Hassan Shuhaimi Nik Abd. Rahman & Othman Mohd. Yatim. *Antiquities of Bujang Valley.* Kuala Lumpur: Museum Association of Malaysia.
- Sauvaget, J. 1948. *'Aḥbār aṣ-Šin wa l-Hind: Relation de la Chine et de l'Inde, rédigée en 851.* Paris: Societe d'Édition (les Belles Lettres).
- . 1954. Jean Sauvaget "Les merveilles de l'Inde," *Mémorial Jean Sauvaget, Tome 1,* Damas: Institut Français de Damas. pp.189-309.
- Sezgin, Fuat (ed.). 1988. Ibn Faḍlallāh al-'Umārī, Shihāb al-Dīn Aḥmad ibn Yahyā, *Routes toward Insight into*

- the Capital Empires (Masālik al-Abṣār fī Mamālik al-Amṣār)*. Publications of the Institute for the History of Arabic-Islamic Science. Series C (Facsimile Editions). 27 vols. Frankfurt am Main.
- al-Shārūnī, Y. 1990. Yūsuf al-Shārūnī (ed.). Buzurk b. Shahriyār. *'Ajā'ib al-Hind min Qiṣaṣ al-Milāḥat al-'Arabiya*. London: Riad El-Rayyes Books Ltd.
- Sulaymān & Abū Zayd (ed.). 1991. *Akhbār al-Ṣīn wa'l-Hind*. ed. by Ibrāhīm Khūrī. Kitāb al-Abḥāth no.4, Beirut: Maṭbū'at Dār al-Mawṣim li-I'lām.
- Tibbetts, G.R. 1971. *Arab Navigation in the Indian Ocean before the Coming of the Portuguese*. London: The Royal Asiatic Society of Great Britain.
- . 1979. *A Study of Arabic Texts containing material on South-East Asia*, Leiden: E.J. Brill.
- al-Turayhī, M.S. 1987. Muḥammad Sa'id al-Turayhī (ed.). Buzurk b. Shahriyār. *'Ajā'ib al-Hind Barr-hu wa Bahr-hu wa Jazā'ir-hu*. Dā'irat al-Ma'ārif al-Hindiya, 2: Silsilat Dirāsāt wa-Abḥāth wa Nuṣuṣ 'an Ta'rikh Shibh al-Qārrat al-Hindiya, Bombay: Najafi House.
- al-'Umarī (Ms.). Ibn Faḍl Allāh al-'Umarī (d.1349) . *Masālik al-Abṣār fī Mamālik al-Amṣār*. Manuscript: Süleymaniye Library, Ms. No.2227.
- Yāqūt (ed.). 1866-1870. Yāqūt al-Ḥamawī. *Mu'jam al-Buldān (Jacut's Geographisches Wörterbuch)*. ed. by F. Wüstenfeld. 6 vols. Leipzig.

趙如适 『諸蕃誌』馮承鈞撰 1956 中華書局出版：北京。

藤本勝次・福原信義 1978 藤本勝次・福原信義（訳注）『インドの不思議』（関西大学東西学術研究所訳注シリーズ2）関西大学出版・広報部。

家島彦一 1991 『イスラム世界の成立と国際商業 — 国際商業ネットワークの変動を中心に —』東京：岩波書店。

——— 1993 『海が創る文明 — インド洋海域世界の歴史 —』東京：朝日新聞社。

